

感狀及叙任辭令

藩 達

(明治元年七月十九日)

五三八

西郷吉之助

右者此節諸郷等兵隊出軍付爲總差引被差出候條可申渡候

七 月

刑 部(新納)

藩 達

(明治元年七月二十二日)

西郷吉之助

右者兵隊出軍總差引被仰付置候付越後表へ被差出條可申渡候事

藩 達

(明治元年八月三日)

西郷吉之助

右者越後表出兵總差引被仰付御兵具方附士一小隊並御兵具方二小隊被召付出軍被仰付置候付來六日出艦春日丸より被差出候條此旨申渡大隊長御兵具奉行船將其外可承

向へも可申渡候

八 月

良 馬(津島)

御沙汰書

(明治元年十月三十日)

西郷吉之助

春來久々之軍旅兵部卿宮を輔翼し書策謀略其機宜に中り速に東北平定之功を奏候段
叡感不淺候今般凱旋に付不取敢爲御太刀料金三百兩下賜候事

十 月

行 政 官

辭 令

(明治元年十一月三日)

西郷吉之助

大總督參謀被免候事

感狀及叙任辭令

五三九

感狀及叙任辭令

五四〇

依願歸國被仰付候事

西郷吉之助

十一月

行政官

御沙汰書

(明治二年正月十八日)

西郷吉之助

先般依願歸國被仰付置候處御用有之候に付早々上京可致旨御沙汰候事

正月

行政官

藩辭令

(明治二年二月十五日)

西郷吉之助

參政被仰付候事

二月

知政所

軍務官達書

(明治二年四月)

西郷吉之助

今般賞典御取調之儀に付參謀勤役中管轄致居候諸藩並府兵等諸所戰爭之勤惰強弱各差等を附け別紙雛形へ相記可差出候事

一藩々情實之善惡勞逸等は別紙へ可相記事

一軍監軍曹御使番會計方並金穀兵食方等相届又勤惰之差等是又別紙に可相記事

前件之通被

仰出候條至急取調言上可致候事

四月

軍務官

御沙汰書

(明治二年六月)

西郷吉之助

積年勤王之志不淺丁卯以來大政復古之盛業を賛け續て參謀之命を奉じ東京城を收め

感狀及叙任辭令

五四一

感狀及叙任辭令

五四二

其後北越に出張軍勢勵精指揮屢緩急其圖に中り竟に成功を奏し奉安宸襟候段叡感不
斜依爲其賞貳千石下賜候事

六月

行政官

別紙

西郷吉之助

高貳千石依勳功永世下賜候事

明治二年己巳六月

叙位宣下

(明治二年九月)

西郷吉之助隆盛

大政復古之際に方り身を以て國に許し鞠躬盡力以て成効を奏候段 叡感不斜仍賞其
功勞正三位に被叙候事

九月

太政官

叙正三位

藤原隆盛

右大臣從一位藤原朝臣實美宣

大辨從三位藤原朝臣俊政奉

藩 達

(明治三年正月十八日)

一養俸百五拾俵

西郷吉之助

右者辭職申出難默止願意被聞召通無餘儀被成御免候條追々御用之節は御前へも被召
出御政事向相談等承候様被仰付候依之別段之御優待を以右之通一世被下置候條向々
へ申渡可候

正月

知政所

感狀及叙任辭令

藩 達

(明治三年七月三日)

五四四

西郷吉之助

右者先般辭職之節政事向時々可致相談相達置候處改て以來政府へ出席諸務可致取扱候
左候て席順は此内勤職之通可相心得候

七月

右之通今日御直に被仰達候條向々へ可申渡候

七月三日

知政所

辭令

(明治三年七月)

西郷吉之助

任鹿兒島藩大參事

右

宣下候事

庚午七月

太政官

藩 達

(明治三年十二月二十八日)

西郷吉之助

右者御用有之勅使へ被召附急にて出府被仰付候條向々可申渡候

十二月二十八日

知政所

藩 達

(明治四年三月九日)

西郷吉之助

右者今般就御上京御供被仰付候條向々へ可申渡候

辛未三月九日

知政所

辭令

(明治四年六月二十五日)

鹿兒島藩

大參事

感狀及叙任辭令

五四五

感狀及叙任辭令

五四六

西 鄉 隆 盛

任參議

右

宣下候事

辛未六月二十五日

太 政 官

辭 令

(明治五年五月十九日)

參 議 西 鄉 隆 盛

兼任陸軍元帥

參議兼陸軍元帥 西 鄉 隆 盛

補近衛都督

辭 令

(明治五年五月二十九日)

參議兼陸軍元帥 西 鄉 隆 盛

任陸軍元帥兼參議

辭 令

(明治六年五月十日)

陸軍元帥兼參議 西 鄉 隆 盛

任陸軍大將兼參議

辭 令

(明治六年十月二十五日)

陸軍大將兼參議 西 鄉 隆 盛

依願免兼官

○

陸軍大將 西 鄉 隆 盛

依願近衛都督免候事

感狀及叙任辭令

五四七

遺訓及手抄言志錄

遺訓

一 廟堂に立ちて大政を理するは天道を行ふものなり故に公平無私正道を踏み賢人を探り能く其職に任ふる人を用ひて政柄を執らしむるは即ち天意なり故に眞に賢人と認むれば直ちに我が職を讓るの誠心なかる可からず如何に國家に勳勞あるも其職に任へざる人を官職を以て賞するは甚だ誤れり官は其人を選びて之を授け功有れば之を賞し之を愛すべし是れ徳と官と相配し功と賞と相對するの義なり

一 賢人百官を總べ政權一途に歸し一格の國體定制なければ縱令人材を登用し言路を開き衆説を容るゝとも取捨方向なく事業雜駁にして成功期す可らず昨日命令を出し今日之を廢止するが如きは皆統轄する所一ならず施政の方針一定せざるの致す所なり

一 政の大體は文を興し武を振ひ農を勵ますの三にあり其他百般の事務は皆此三を助くるの具なり此三の中に於て時に從ひ勢に依り施行先後の順序ありと雖も此三を後に

して他を先にすることあるべからず

一 萬民の上に位する者己を慎み品行を正しくし驕奢を戒め節儉を行ひ職務に精勵して人民の標準となり下民をして其勤勞を感謝せしむるに至らざれば政令は行はれ難し然るに草創の始に立ちて家屋を飾り衣服を文り美妾を抱へ蓄財を計らば何を以て維新の功業を遂ぐるを得んや今日に至りては戊辰の義戦も偏に私を營みたる姿になり天下に對し戦死者に對して面目なきことなり

一 翁曾て「幾歴辛酸志始堅、丈夫玉碎愧軛全、一家遺事人知否、不爲兒孫買美田」との七絶を書して曰く予若し此言に違はゞ西郷は言行相反するものと世間の譏りを受くるも可なりと

一 人材を採用するに君子小人の辨酷に過ぐるときは却て弊害あるものなり何となれば開闢以來世上一般十に七八は小人なれば能く小人の情を察し其長所をとり之を小職に用ひ其才藝を盡さしむべきなり東湖先生曰く「小人才藝あり用ふべし然れども之を長官に用ひ重職を授くれば必ず邦家を覆へすべし」と

一 事大小となく正道を踏み至誠を推し決して詐謀を用ふべからず人多くは故障生ずる時に臨み詐謀を以て其故障を通過すれば其他は憂ふるに足らずとなせども詐謀の弊必ず生じ事必ず破るゝものなり之に反し正道を以て之を行へば目前には迂遠に見ゆるとも成功は却て早し

一 廣く各國の制度を採り開明に進まんと欲せば先づ我國の本體を立て風教を張り而して後徐かに彼の長所を斟酌すべし然らずして猥りに彼に倣はゞ國體は衰頹し風教は萎靡して匡救すべからざるに至るべし

一 忠孝仁愛教化の道は政事の大本にして萬世に亘り宇宙に彌り易ふべからざるの要道なり道は天地自然のものなれば西洋と雖ども決して別なし

一 人智を開發するは愛國忠孝の心を開くなり國に盡し家に勤むるの道明かならば百般の事業は從て進歩すべし或は耳目を開發せんとして電信を架け鐵道を敷き蒸氣器械を發明するも何故に電信鐵道の缺くべからざるものなりやと云ふ點に注意せず猥りに外國の盛大を羨み利害得失を論せず家屋の構造より玩弄物に至るまで一々外國を

仰ぎ奢侈の風を長じ財用を浪費せば國力疲弊し人心浮薄に流れ結局日本身代限りとなるの外なし

- 一 文明とは道の普く行はるゝを言へるものにして官室の壯嚴衣服の美麗外觀の浮華を言ふに非ず世人の西洋を評する所を聞くに何をか文明と云ひ何をか野蠻と云ふや少しも了解するを得ず眞に文明ならば未開の國に對しては慈愛を本とし懇々説諭して開明に導くべきに然らずして殘忍酷薄を事とし己を利するは野蠻なりといふ可し
- 一 西洋の刑法は専ら懲戒を主として苛酷を戒め人を善良に導くにつとむ故に囚獄中の罪人を遇するの道又甚だ緩にして或は鑒戒となるべき書籍を與へ場合に依りては親族朋友の面會をも許すこと珍しからずと聞く尤も聖人の刑を設けられしも忠孝仁愛の心より鰥寡孤獨を愍み人の罪に陷るるを恤ひ給はん趣旨に相違なけれども實地に於て今の西洋の如くなりしや否や書籍の上には見えず此點は實に文明なりと感ずるなり
- 一 租税を薄くして民を裕にするは即ち國力を養成する所以なり故に國家多端にして財

用の足らざるを苦むとも租税の定制を確守し上を損して下を虐げぬものなり能く古今の事迹を見よ道明かならず財用不足するときは必ず曲智小慧の俗吏を用ひ巧に收斂して一時の缺乏を糊塗するを理財に長せる良臣となし種々の手段を以て民を虐ぐるが故に人民は苦惱に堪へず收斂を逃れんとして自ら譎詐狡猾に趣き上下互に欺き官民警敵となり終に分崩離折に至るに非ずや

- 一 會計出納は制度の由て立つ所百般の事業皆是より生ず實に經綸中の樞要なれば慎まざる可からず其大體を言へば入るを量りて出づるを制するの外更に他の術數なし
- 一 歳の入る所を以て百般の制限を定め會計を總理するもの身を以て制を守り定制を超過せしむ可からずして時勢に制せられ制限を慢りにし出づるを見て入るを計らば民の血を絞るの外なきなり然らば假令事業は一旦進歩する如く見ゆるも國力疲弊して濟救すべからざるに至らん
- 一 常備の兵數も會計の制限に依る決して虚勢を張る可からず士氣を鼓舞して精兵を養成せば兵數は尠なくとも折衝禦侮共に缺くことなかる可し

一節義廉恥を失て維持するの道決してある可からず西洋各國同然なり上に立つ者下に臨みて利を争ひ義を忘るゝときは下皆之に倣ひ人心忽ち利財に趨り卑吝の情日々に長じ節義廉恥の志操を失ひ父子兄弟の間も錢財を争ひ相讐敵視するに至る斯の如くば何を以て國家を維持すべけんや徳川氏は將士の猛き心を殺ぎて世を治がめしが今は昔時の猛士より猶ほ一層猛き心を振ひ起さずんば萬國對峙は望むべからず普佛の戰佛國三十萬の兵三ヶ月の糧食ありて降伏せしは餘り算盤に精しき故なり

一正道を踏み國を以て斃るゝの精神無くんば外國交際は全かる可からず彼の強大に畏縮し圓滑を主として曲げて彼の意に従順するときは輕侮を招き好親却て破れ終に彼の制を受くるに至らん

一國の凌辱せらるゝに當りては縱令國を以て斃るゝとも正道を踐み義を盡すは政府の本務なり然るに平日金穀利財の事を議するを聞けば如何なる英雄豪傑かと見ゆれども一朝血の出る時に臨めば頭を一所に集め唯目前の苟安を謀るのみにして戰の一字を恐れ政府の本務を墜さば商法支配所と言ふ可きのみ更に政府には非ざるなり

一古より君臣共に己を足れりとする世に治功の擧りたることなし自己を足れりとせざるより下々の言も聽き入るゝものなり自己を足れりとすれば人若し己れの非を云へば忽ち怒る故に賢人君子は之を助けざるなり

一何程制度方法を論ずるとも其人に非ざれば行はれ難し人有て後方法の行はるゝものなれば人は第一の寶なり己れ其人に成るの精神肝要なり

一道は天地自然のものなれば講學の道は敬天愛人を目的とし身を修するに克己を以て終始す可し己れに克つの極功は「母_レ意母_レ必母_レ固母_レ我」と云へり總て人は己れに克つを以て成り自ら愛するを以て敗るゝものなり能く古今の人物を見よ事業を創起する人其事大抵十に七八までは能く爲し得れども残り二三を終りまで成し得る人の稀なるは能く己を慎み事をも敬する故功も立ち名も顯はるゝなり功立ち名顯はるゝに従ひ何時しか自ら愛するの心起り恐懼戒慎の意弛み驕矜の氣漸く長じ其爲し得たる事業を負み唯々我事を仕遂げんことに焦せり拙策に陥りて終に破るゝものなり故に己れに克ちて賂す聞かざる所に戒慎すべきものなり

一己れに克つに事々物々時に臨みて克つが如きは克ち得べからず豫て氣象を以て克ち居る可きなり

一學に志す者規模を宏大にせずんばある可からず然れども唯是れのみ偏倚すれば或は身を修むるに疎になり規模を宏大にして己れに克ち男子は人を容る可く人に容れられては濟まざるなり古語に曰く

恢宏其志氣者、人之患、莫大乎自私自吝安卑俗、而不以古人自期

古人を期するには堯舜を以て手本とし孔夫子を教師とす可し

一道は天地自然のものは之を行ふものなれば天を敬するを目的とす天は人も我も同

一に愛し給ふ故我を愛する心を以て人を愛するなり

一人を相手にせず天を相手にすべし天を相手にして己を盡し人を咎めず我が誠の足らざる所を尋ぬ可し

一己れを愛するは宜しからざる事の第一なり修業の出來ざるも事の成らざるも過を改むる事の出來ざるも功に伐り驕慢の生ずるも皆自ら愛するが爲めなれば決して己れ

欠

欠

一今の人才識あれば事業は心次第に成るものと思へども才に任せて爲す事は危くして見る可からず體有りて始て用は行はるゝものなり肥後の長岡先生の如き君子人は今の世には復た見るを得ず嘆すべし

夫天下非誠不動、非才不治、誠之至者其動也速、才之周者其治也廣、才與誠合然後事可成

一翁犬を驅り兔を追ひ山谷を跋渉して終日獵り暮し一田家に投宿し浴終りて心神甚爽快に見ゆる時悠然と言ひけらく「君子の心は常に斯くの如くなる可し」と

一身を修め己を正しくして君子の體を具ふるとも處分の出來ざる人は木偶人も同然なり譬へば數十人の客不意に入り來らんに如何に饗應せんと考ふるも豫て器具調度の備無ければ唯心を勞するのみにして取賄ふこと出來難し常に備あれば幾人なりとも數に應じて賄はるゝなり故に平日の用意肝腎なり

文非銘槩也、必有處事之才、武非劍楯也、必有料敵之智、才智之所在一焉而已。

一事に當り思慮の乏しきを憂ふること勿れ凡そ思慮は平生默坐靜思の際に於てす可し

有事の時に至り十に八九は履行せらるるものなり事に當り卒爾に思慮することは譬へば臥床夢寢の中奇策妙案を得るが如く翌朝早起の時に至れば無用の妄想に類すること多し

一漢學を學べるものは爛々漢籍に就て道を學ぶべし道は天地自然の理又東西の別なし苟くも當時萬國對峙の形勢を知らんと欲せば春秋左氏傳を熟讀し助くるに孫子を以てすべし當時の形勢と略ぼ大差なかる可し

一誠は深く厚からざれば自ら支障生ずべし如何ぞ慈悲を以て失を取るべけんや誠の受用は睹ざる所に於て戒慎し聞かざる所に於て恐懼するに始まり次第に其功を積みて至誠の位置に至るべし是を名けて君子といふ必ず天地を證據とすべし是を以て事物に問へば隱すものなかるべきなり司馬溫公曰く我が胸中に向ひて言はれざるものなしと茲に至りては天地を證據とする位にてはなく即ち天地と同體なるものなり障礙なる慈悲は姑息に非ずや嗚呼大丈夫姑息に陥るべけんや事の輕重難易を知らば片落ちする心配更にあるべからず

欠

欠

喪已斯喪人喪人斯喪物

士貴獨立自信矣依熱附炎之念不可起

有本然之真已有軀聲之假已湏要自認得

雲煙聚於不得已風雨洩於不得已雷霆震於不得已斯可以觀至誠之作

動於不得已之勢則動而不括履於不可枉之途則履而不危

聖人如強健無病人賢人如攝生慎病人常人如虛羸多病人

急迫敗事寧耐成事

聖人安死賢人分死常人恐死

賢者臨死見理當然以爲分恥畏死而希安死故神氣不亂又有遺訓足以聳聽而其不及聖人亦在於此聖人平生言動無一非訓而臨歿未必爲遺訓視死生真如晝夜無所著念

堯舜文王其所遺典讀訓誥皆可以爲萬世法何遺命如之至於成王顧命曾子善言賢人分上自當如此已因疑孔子泰山之歌後人假托爲之檀弓巨信多此類欲尊聖人而却爲之累

一部歷史皆傳形迹而情實或不傳讀史者湏要就形迹以討出情實

博聞強記聰明橫也精義入神聰明豎也
生物皆畏死人其靈也當從畏死之中揀出不畏死之理吾思我身天物也死生之權在天當順受
之我之生也自然而生生時未嘗知喜矣則我之死也應亦自然而死時未嘗知悲也天生之而
天死之一聽于天而已吾何畏焉吾性即天也軀殼則藏天之室也精氣之爲物也天寓於此室遊
魂之爲變也天離於此室死之後即生之前即死之後而吾性之所以爲性者恒在於死生
之外吾何畏焉夫晝夜一理幽明一理原始反終知死生之理何其易簡而明白也吾人當以此理
自省焉

畏死者生後之情也有軀殼而後有是情不畏死者生前之性也離軀殼而始見是性人湏自得
不畏死之理於畏死之中庶平復性焉

誘掖而導之教之常也警戒而喻之教之時也躬行以率之教之本也不言死之教之神也抑而揚
之激而追之教之權而變也教亦多術矣

閒想客感由於志之不立一志既立百邪退聽譬之清泉湧出旁水不得渾入

心爲靈其條理動於情識謂之欲欲有公私情識之通於條理爲公條理之滯於情識爲私自辨其

通滯者即便心之靈

人一生所遭有險阻有坦夷有安流有驚瀾是氣數自然竟不能免即易理也宜居而安玩而樂焉
若趨避之非達有之見

心之官則思思字唯是工夫字思則愈精明愈篤實自其篤實謂之行自其精明謂之知行歸於
一思字

處晦者能見顯據顯者不見晦

取信於人難也不信於口而信於躬不信於躬而信於心是以

臨時之信累功於平日平日信收効於臨時

信孚於上下天下無甚難處事

意之誠否湏於夢寐中事驗之

不起妄念是敬妄念不起是誠

因民義以激之因民欲以趨之則民忘其生而致其死是可以一戰

漸必成事惠必懷人如歷代姦雄有竊其秘者一時亦能遂志可畏之至

匿情似慎密柔媚似恭順剛復似自信故君子惡似而非者

事君不忠非孝也戰陣無勇非孝也會子孝子其言如此彼謂忠孝不兩全者世俗之見也

不可誣者人情不可欺者天理人皆知之蓋如而未知

知是行之主宰乾道也行是知之流行坤道也合以成體軀則知行是二而一一而二

學貴自得人徒以目讀有字之書故局於字不得通透當以必讀無字之書乃洞而有自得

孟子以讀書爲尙友故讀經籍即是聽嚴師父兄之訓也讀史子亦即與明君賢相英雄豪傑相周旋也其可不清明其心以對越之乎

爲學緊要在心一字把心以治心謂之聖學爲政著眼在情一字循情以治情謂之王道王道聖學非二

發憤忠食志氣如是樂以志憂心體如是不知老之將至知命樂天如是聖人與人不同又與人不異講說聖賢而不能躬之謂之口頭聖賢吾聞之一惕然論辨道學而不能體之謂之砥上道學吾聞之再惕然

學稽諸古訓問質諸師友人皆知之學必學諸躬問必問諸必其有幾人耶

以天而得者因以人而得者脆

君子自謙小人自欺君子自彊小人自棄上達下達落在一自字

人皆知問身之安否而不知問心之安否宜自問能不欺闇室否能不愧衾影否能得安穩快樂否時時如是心便不放

無爲而有爲之謂誠有爲而無爲之謂敬

寬懷不忤俗情和也立脚不墜俗情介也

惻隱之心偏民成有溺愛殞身者差惡之心偏民或有自經溝瀆者辭讓之心偏民或有奔亡風狂者是非之心偏民或有兄弟鬩牆父子相訟者凡情之偏雖四端遂陷不善故學以致中和歸於無過不及謂之復性之學

此學吾人一生負擔當斃而後已道固無窮堯舜之上善無盡孔子自志學至七十每十年自覺其有所進孜孜自彊不知老之將至假使其踰耄至期則其神明不測想當爲何如哉凡學孔子者宜以孔子之志爲志

自彊不息天道也君子所以也如虞舜孳孳爲善大禹思日孜孜成湯苟日新文王不遑暇周公坐

以待且孔子發憤忘食皆是也彼徒事靜狼眠坐而已則與此學脈背馳

自強不息時候心地光々明々有何妄念游思有何嬰累罣想

提一燈行暗夜勿憂暗夜只賴一燈

倫理物理同一理也我學倫理之學宜近取諸身即是物理

濁水亦水也一澄則爲清水客氣亦氣也一轉則爲正氣遂客工夫只是克己只是復禮

理本無形無形則無名矣形而後有名既有名則理謂之氣無不可故事指本體則形後亦謂之理
專指運用則形前亦謂之氣竝無不可如浩然之氣專指運用其實太極之呼吸只是一誠謂之氣
原即是理

物我一體即是仁我執公情以行公事天下無不服治亂之機在於公不公周子曰公於己者公於
人伊川又以公理釋仁字餘姚亦更博愛爲公愛可並攷

尊德性是以道問學即是尊德性先立其大者則其知也真能迪其知則其功也實畢竟一條路往
來耳

周子主靜謂心守本體圖說自註無欲故靜程伯子因此有天理人欲之說叔子持敬工夫亦在此

朱陸以下雖各有得力處而畢竟不出此範圍不意至明儒朱陸分黨如敵讐何以然邪今之學者
宜以平心待之取其得力處可也

象山宇宙內事皆已公內事此謂男子擔當之志如是陳滯引此注射義極是

講論語是悲交教子意思講孟子是伯兄誨季意思講大學如綱在綱講中庸如雲出岫

易是性字誰脚詩是情字註腳書是心字註腳

獨得之見似私人驚其驟至平凡之議似公世安其狃聞凡聽人言宜虛懷而邀之勿苟安狃聞可
也

心理是豎工夫博覽是橫工夫豎工夫則深入自得橫工夫則淺易汎濫

讀經宜以我之心讀經之心以經之心釋我之心不然徒爾講明訓話而已便是終身不曾讀

引滿中度發無空箭人事宜如射然

前人謂英氣害事餘則謂英氣不可無但露圭角爲不可

刀槩之技懷怯心者齟齬勇氣者敗必也泯勇怯於一靜忘勝負於一動動之以天廓然太公靜之
以地物來順應如是勝矣心學亦不外於此

無我則不獲其身即是義無物則不見其人即是勇
自反而縮者無我也雖千萬人吾往矣無物也
三軍不和難以言戰百官不和難以言治書云同寅協恭和衷哉唯和一字一事治亂
凡事有真是非有假是非假是非謂通俗之所可否年少未學而先了假是非迨後欲得真是非亦
不易人所謂先入爲主不可如何耳
果斷有自義來者有自智來者有自勇來者有並義與智而來者止也徒勇而已者殆矣
公私在事又在情事公而情私者有之事私而情公者有之爲政者宜權衡人情事理輕重處以用
其中於民
慎獨工夫當如身在稠人廣坐中一般應酬工夫當如閒居獨處時一般
心要現在事未來不可邀事已往不可追纔追纔邀便是放心
物集於其所好人也事赴於所不期天也
人貴厚重不貴遲重尙真率不尙輕率
凡生物皆資於養天生而地稂之人則地氣之精英吾欲靜坐以養氣動行以養體氣體相資以稂

此生所以從地而事夫

凡爲學之初心立欲爲大人之志然後書可讀也不然徒貪聞見而已則或恐長傲飾非所謂假冠
兵資盜糧也可虞

以真已克假已天理也以身我害心我人欲也

無一息間斷無一刻急忙即是天地氣象

有心於無心工夫是也無心於有心本體是也

不知而知者道心也知而不知者人心也

心靜方能知白日眼明始會識青天此程伯子之句也青天白日常在於我宜揭之座右以爲警戒

靈光充體時細大事物無遺落無遲疑

人心之靈如大陽然但克伐恐欲雲霧四塞此靈烏在故誠意工夫莫先於掃雲霧仰白日凡爲學
之要自此而起基故曰誠者物之終始

胸次清快則人事百難亦不阻

人心之靈主於氣々體之充也凡爲事以氣爲先導則舉體無失措技能巧藝亦皆如是

靈光無障碍則氣乃流動不餒四體覺輕

英氣是天地精英之氣聖人蘊之於內不宜露諸外賢者則時々露之自餘豪傑之士全然露之苦夫絕無此氣者爲鄙夫小人碌々不足算者爾

人湏著忙裏占間苦中存樂工夫

凡區處人事當先慮其結局而後下手無楫之舟勿行無的之箭勿發

朝而不食則晝而饑少而不學則壯而或饑者猶可忍惑者不可奈何

今日之貧賤不能素行乃他日之富貴必驕泰今日之富貴不能素行乃他日之患難必狼狽

雅事多是虛勿謂之雅而耽之俗事却是實勿謂之俗而忽之

歷代帝王除唐虞外無真禪讓商周已下奏漢至於今凡二千二史皆以武開國以文治之因知武猶質文則其毛彩虎豹犬羊之所以分也今之文士其可忘武事乎

遠方試步者往々舍正路趨捷徑或繆入林莽可嗤也人事多類此時記之

智仁勇人皆謂大德難企然凡爲邑宰者固爲親民之職其察奸匿矜孤寡折強梗即更三德實事宜能就實迹以試之可也

身有老少而必無老少氣有老少而理無老少湏能執無老少之心以體無老少之理

【按】隆盛佐藤一齋の言志錄千三十四條中より百餘條を手抄し以て座右の銘となせしものなり

附 録

橋本左内の書

(安政四年十二月十四日)

一小冊添

昨日は乍例失敬而已相働多罪奉萬謝候小拙不快は追々宜方に御座候間乍憚御休情可被下候扱橋公御行狀記略出來仕候間貴介へ附托仕候餘は明夕迄に呈上可申候左様御含置被下候様希度候草々拜復

臘月十四日

橋 本 左 内

西郷吉兵衛様

橋本左内の書

(安政五年正月二十六日)

拜呈然ば過日は毎々御苦勞相成御蔭を以て内廷之御都合逐々宜御模様千萬御同慶奉存候逐一言上仕候處小拙より宜了得御意旨被申付候扱爾後例件御都合別に相變候事は無

御座候不相替世評は紛々に候得共所要大本は動搖不申鹽梅實に頼母敷と存居候得共何分大切之事故寸歩も見放は出來兼候殊更人情反覆可恐儀と奉存候間此上とも厚御盡力爲國家奉願候且又今般弊國內用に付國元早驅にて罷越來月下旬迄留守に相成申候留守中根靱負と申候同志より萬端御掛合可申上候此人には小拙同様御打明被下聊仔細無御座候此段出立前以參御頼談可申上存居候得共迎も其暇なく不能已以書中得御意候尤國元行他へは秘居候得共極御同志之中故乍密々相洩置申候此條御含可被下候尙委細は歸府之上萬堵可申上候乍憚堀兄へは宜御傳聲奉願上候右得貴意候爲早々頓首

正月六二十日夜認

橋 本 左 内

西郷吉兵衛様

追而中根へは萬事貴兄之事相咄置候寡君も承知之儀に御座候間吳々御勞心なく様奉願候扱今朝日下部兄御光臨之由然る處外向へは不快と申相斷候様取次へ申付置候故御人柄も不辨無譯御斷申上候由實以赤面恐怖之至何れ他日面謝可仕候得共此儀貴兄よりも宜被仰上候様相願申置候實以同志中は不包相談度事に候得者必ず小拙慮を設

御斷り不申上條御陳告可被下候何分時候御厭御精勤之程奉希上候以上

橋本左内の書

(安政五年五月十七日)

内用御直展書付四通添

以手紙得御意候然ば昨日御來狀之節御約申置候御呈書一並に御封物一爲持差出候間御持歸之上可然御披露可被下候右要用申上候迄如此御座候以上

五月十七日

橋 本 左 内

西郷吉兵衛様

再伸昨日は御懇訪奉謝候其節御頼之書付類取集差上申候此外小拙手にて取調候も御座候得共其分は此節他借相成居候間還候はゞ御同志君之内へ可差出候右書付之の中には忌諱之條も有之且太閤之事甚敷認有之候得共此は大に失事實居候内實は大閤聰明に相違無之よしに御座候且又此頃にては京師之蜂起(九十四人)連中も大に崩れ立纔八九人に相成候よし申來候此等爲御心得御内々申上候今日は降雨中御上途嘸々御迷惑奉拜察候此

表之御用何成共承度奉存候此龜紙並雲丹輕品に御座候得共去年御用も御頼之御事故寡君より爲御餞別貴兄へ御遣し被成度との御事に御座候此段御承知被下候以上

島津齊彬川路左衛門尉に與ふる書 (安政五年六月十八日)

一翰致拜呈候甚著之節御座候處愈御清安珍重御儀存候然ば此節御轉役之よし驚入申候しかし加様之御時節却而御安心に存候是迄厚く御世話被下萬端都合も宜敷忝次節存候扱又異船一條種々入組相成不容易時節と恐入存候今日家來吉兵衛差立候に付御内々は迄之御禮可申述以自書申上候以來萬事御心易いたし度猶吉兵衛可申上候恐々謹言

六月十八日

齊 彬

川 路 君

猶々著氣御自愛專一存候乍末筆御令室に宜敷希申候以上

新納駿河島津豊後に贈る書 (安政六年十一月二十九日)

法姓院 忍 向

右者御當地え入來西郷三助と俱に一緒海中に飛入相果候形行先便細に極内用を以申越通に候右に付而者京都表御届向之儀及吟味候處京都御尋者之段は筑前盜賊方より申出候迄にて未從公邊御尋方表向被仰渡候には不相成候へ共忍向下男右盜賊方に引渡にも相成候に付をのづから御取糺にも可相成勿論右成行に付てはいづれ京都町奉行所に不及御届候ては相濟間敷哉就ては京都御留守居え形付申遣聞合之上御届不被差出候ては不相濟儀に候はゞ別紙草案之趣にて被差出候方可然存候松平美濃守様御方え及掛合候處別紙寫之通返答申來候に付今日便京都留守居より其段申越候

御小姓組

西 郷 三 助

右者前條同斷に付入水いたし候節少々呼吸通居候に付親類え引渡爲致養生候處追々快氣之向に相心得候に付御取扱向大目付え相達置候處當分にては忍向相手之場に相成存命之儀公邊に響合候ては誠に不容易譯合御難澁之儀にて何分當地え被召置者に無之候間秘密之取計にて變名之上此涯三島之内え被遣何れ其節表向は溺死之筋に可仰付哉右

にて萬一檢使等被差越死體見分等之儀も難計候に付近頃相果たる罪人之死體見分に可被差出哉左候ば右之手當を以埋置候様可爲仕勿論終身端島へ被遣置候ては不便之至候間以後靜謐罷成何も掛念無之都合相成候ば其節之形行次第可被召歸哉之旨被申出得と及評議候處西郷儀右通相手者之場に相成候ては於公邊は不通御取扱可相成候へ共此御方様には譯合も有之候に付重き御取扱も出來兼候付大目付吟味通可被仰付哉左候て右通の譯合に付ては於島方御給料等之儀は御物より可被下哉と申談宰相様御内慮奉伺候處其通被仰出候に付大目付え相達近々七島之内へ極内被遣筈に候左候て給料等之儀は中村新助え極内爲致吟味先年甲斐清一屋久屋被遣候先例も有之候に付其振合を以て被成下筈に候右旁極御内用を以申越候尤京都御留守居え申遣御問合書壹通爲御心得差上候以上

但三助儀菊池源吾と變名申付候尤筑前返札には此方え前以掛合爲相成哉に相見候得共未不相届候此段は爲御心得に候

午十一月二十九日

駿 河

豊 後 殿

新納駿河京都留守居に與ふる書

京都東山清水寺山内
成就院住居法姓院

忍 向

右者變名にて御當地え入來西郷三助一緒に海中に飛入相果候に付御届之儀は別紙を以て申越通候右に付ては於其表西郷俱に嚴敷御探索に相成候ば先便より申越通に候忍向一旦は筑前之内に忍居哉に候處同所も御手相付候由にて御當地えは三寶院御門跡御用之筋を以御内甲村左京名前之證文持參にて入來候へ共其趣手廣不相成候様御届書には相省候間萬一下男御糺方之上存龍院一條御糺も有之候はゞ同人國元には及糺方右忍向は、の御猶子にて兼て知音之者に候處御當地へ差越候由にて烏渡見込を尋候得共西郷三助えの用事有之差越候段承り候迄にて何様之譯も不存且變名之上存龍院え用事に付入來之儀は全不存旨申出候に付御届書には相省き候段程能可申述候

一西郷死體之儀は御届書には不書載候是以御糺も有之候はゞ假に土葬申付置候段可申出候萬一其趣不書候て不相濟候はゞ何様共可取計候

一右に付死體見分等に檢使之者被差遣儀も難計若其通之儀に候はゞ聞合いたし候儀は其通にて何分早々可被申越候

一右に付變之成行等申出候書付二通爲心得寫差上候

右旁御内用を以申越候條何篇無手拔様可取計候以上

但西郷吉兵衛儀三助と致改名候此段は爲心得に候

午十一月二十九日

駿 河

伊 集 院 殿

京都留守居届書

忍 向

右者山城國醍醐山三寶院御門跡御用齋溪院鑿水と申家來一人下男一人召列肥後國より

故薩摩守領内薩州出水郡阿久根村え着船城下町に差越故薩摩守家來西郷三助儀知音之由にて用向有之致面會度申越候處先月十五日夜鑿水旅宿え三助差越其夜日州之方え差越候由にて領内隅州之内噌唵郡廻村之内福山村と申所迄船雇入城下より右三助俱に乗組出帆候處翌十六日曉於洋中兩人共一緒に海中に飛入候に付乗組之者共濱へ引揚致介抱元之通城下町え列歸成行申出候に付役目之者差出致養生候へ共鑿水儀は無程相果三助には少々呼吸通居候に付是亦爲致養生候得共同日々相果子細全相知不申其外船中者迄も及糺方候處不意に右通之次第にて是以何も子細不相分段申出死體相改候處溺死無相違鑿水死體葬方之儀は家來下男願出候に付假に土葬申付置候然處松平美濃守殿盜賊方白石潤太松尾平太兩人城下へ差越此方足輕之者え面會右鑿水主從三人足跡相尋爲捕方差越候に付都合願入候段承届候旨右足輕申出候へ共鑿水儀は右通死歿又事故形行申聞死體見分之上引渡度且家來下男迄も召捕候付ては三寶院御門跡御内之者故御届向之儀及示談候處右は御門跡御用之者に無之實は京都東山清水寺成就院忍向と申者にて京都より御尋方相成捕方に差越候へ共相果候ては死體見分に不及家來者中途より道列

之者故御用無之下男者爲證據列越度承届候旨申出候に付猶又下男及糺方鍔水は全偽名にて右忍向と申者に無相違段申出候に付下男は右捕方之者共え引渡候段國元家老共申越右松平美濃守様方にも及掛合此段御届申上候以上

島津又次郎内

伊集院 太郎右衛門

足輕坂口吉兵衛上申書

京都東山清水寺山内
成就院隱居法姓院

忍 向

右忍向家來

雲 外

右者忍向事京都より子細有之御當地え參居候處爲捕方盜賊方被差越右忍向御渡相成候而者御差障相成候譯合被爲在右西郷三助殿同道日州表え被遣置右に付地理旁不案内候

間私致案内可成邊鄙之場所に忍置付添程能取計致用辨候様被仰付安政午十一月十五日今夜中福山に相渡高岡御關外之相廻居候様御承知同夜八ツ半時分都而同船前之濱致出帆同十六日未明龍ヶ水より三里程も於洋中三助殿忍向小用相立不圖組合海中え飛入候付相警順風走船之事故則帆綱等脇差を以切拂帆下げ候得共最早三十間餘も走行船頭共え致下知早々漕戻候處何分にも組合居候付乍漸兩人共引揚段々致介抱候得共寒中之事故相溺乍兩人存無覺殊に船中皆共着替等も全く所持之者も無御座私致着用居候着物を以兩人に着せ替忍向事は右家來共に介抱方致下知三助殿儀者私肌身に付相暖介抱致候得共寒中之砌洋中之事故方便も無之陸地華倉に早々押返し焚火等を以致介抱候得共忍向事終其詮無御座候三助殿事も未快方無之乍兩人存命無之候而は甚殘多存精々介抱致候處同朝五ツ半時分にも相成少し快き方相見得猶更養生致漸々快く彌愷に見請候に付前之濱に船相廻し形行御届申上置又々船に立歸り致看病居候處醫師被遣同日親類え御渡相成忍向事は御見分之上南林寺え假埋被仰渡候事

右之通御座候以上

大久保正助の書 (安政六年十二月)

略前 先月五日自太守様以御直筆御内諭之趣奉拜承其次第は當時世御慨歎被爲在昨年來貴兄一條を初其後同志突出之事實被聞召通候御譯有之谷村より大山え被相下候御書取之趣者方今時世不穩萬一時變到來之節者順聖院様御趣意奉繼述以御國家天朝御奉護可被抽誠忠思召に付各々國家之柱石と成て我等之不肖を輔け可吳様御思召之御旨云々御實名御花押誠忠士之面々中へとの御宛に御座候仍而一同難有拜承連名血判を以て御請書差上候時宜に御座候及此舉候儀畢竟貴兄之御趣意を以私共一向決心仕候儀故其段相演連名仕候 先是豊州儀多年之勤勞を被賞御城代一篇被仰付候

一同九日總州再職被仰付候豊攘除總公選舉に而者駿暨武之輩妨之偏に防公之御英斷に出候由駿此日より稱虛病退職之心底に候由暨當分温泉に而是以同様之心組に候半乎併是は御攘除之節に決居候由其後蓑傳歸役三藤御側用人大四を被復候山喜寺社方福取次

直御勘定方小頭を被退候玉里御小納戸以上御側役御納戸奉行御茶道に至迄願通御免被仰付候老公御逝去後官物雇人夫を以て私邸へ運送爭奪之振舞不可言實以極罪に可被處儀に候得共御逝去無間事故御仁宥之御處置と被窺候

一以上之事件は先便より申上越置候間態と不及詳悉候其後之次第格別變態も無之候得共日に盛大に歸向する之勢に御座候山壯儀先月末再役急出府被仰付致出立候(是儀豊賊等退職後屢催密會幕へ意通之恐有之御臺様え御結其餘奸路閉塞之爲云々之御秘計と被窺候)一姦之奸謀は勿論幕之暴威別而御嫌疑被爲憚十分之御處置被遊兼形に窺候夫故御軍備者勿論勤王之御大志御卓立三藩等御結合之儀且貴兄被召返候一條急々御英斷被出來兼候向に御座候折柄京師御献上御劍一條致到來候間(此儀被蒙勅命老公御在世中御奉戴野村助七宰領に而上京之處滯京にて拵方被仰付折角致都合既に成就にならんとする時豊賊より問合到來老公御逝去に付御斷申上候様自太守様拵方成就之上御献上可相成譯候得共是以不相成候に付早々御劍致宰領罷下候様申來形行き陽明家え原田より及披露候處別而之御不都合に而違勅之御名目迄被爲蒙候時宜に

而散々之首尾にて野村罷下候）實に御國家之御一大事不可忍之極罪に候間形行篤と野村へ承候上及建白候趣に者如斯勅命被爲蒙候儀於御家前代未聞之御盛事千載之御名譽に候處一奸之所爲を以御三代様奉汚御名目殊に自太守様勤王之御志云々御内諭之御趣仰出候に付而者夫形被召置候而者人心一同不忍默視尤以來如何様御嚴令被爲下候共被相行候譯合無之候間名分上之御處置を以て極罪相當之御刑罰被爲召加則御人選を以不日上京御斷之上再度御拵方御願御献上相成度（人體之儀幸伊集院交代松元十兵衛へ被仰付候間岩下左士儀他所向にも取馴居學力も有之名義辨別之者に而其任に堪候間是非繰替被仰付度假令此舉無之候共當時非常之時節御留守之儀有志之者御撰不被置候而不被爲濟儀に而無上の機會故是非御裁斷被爲在度云々）奉歎願候君公へは谷村へ直談を遂上書防公へは吉祥院を以建白總州へは蓑氏へ熟談の上趣意相達候手策相廻し候得共何分前件御嫌疑の病根を以御英斷不相調候畢竟蓑田の趣意果決の御處置にては事不成候間御國事治定相成當時先々外事に不及手を引き沈靜寡黙變を待候と之説を持重致し候總州御趣意も專蓑田氏之説に出候間愈以我黨之素志難

達候防公御眞意者隨分御英斷出來居り候得共隱然御後見之思召たて柄權を御避け萬事君意に出候様にと之御忠膽にて御決心之儀も御遠慮被爲在候事件も有之由（君側正邪進退之義等斷然御施し之思召候得共考へ通不參との御意も有之由町田等不斷等之儀御明察且總州も我が意を能く得ずと之御意も有之候由）谷愛岸良御附相成候儀赤心片々是非先君御遺志奉繼事業興復を自任し報國之志操不可奪（君側文武廢弛之儀を興起し其餘矯弊の事件多々有之專此士之力に出候）防總之間に周旋し御眞意を窺ひ得大に道を聞き候兒雄儀太守様御附相成候既住を悔ひ當分兩士へ合腑一向ら同腹鈴喜木藤杯其風に附候由

一京師關東之形勢別紙堀士書狀徳田文面之通に御座候間御覽可被下候堀士別而危急の義に付私出府之儀取興し候何分前條通先々手を延き候御趣意に相成候間事を成すの趣向に而御裁斷六ヶ敷候間堀士萬一難に係り候得者外國志中兎而も不致傍觀若哉左様の時宜に及候而は御國家御難題無相違候間不日出府被仰付候はゞ御當地の形行君意の處且防公總州の御趣意云々相通じ度畢竟御國元事情悉曲不相達候故急迫の決心

いたし候譯に候得者何分大事の一條書面にても難申越仍而出府の上篤と申諭何處迄も御趣意相貫御請書差上候詮相立て度と之素志を以防公總州へ奉歎願候（防公へは岸彦總州へは谷愛より篤と事情建白養氏へは直談十分可成之機會相成候）處都合惡敷當日防公御登城無之總州養氏の評議にて一と先づ堀士御下し當日町飛脚被差立御問合相成事情御聞取被成度との事に相決し翌日防公御登城議定之段御相談にて其通御同意相成候由其翌日養氏より口合度譯有之參候様申來差越候處御内諭の趣には何分御國家御大事の儀にて急卒御裁斷被遊兼候に付一と先づ堀士御召下し事情御聞取の上御處置可被爲在との御吟味にて内分御達し申候様にと之事候致承創候事に御座候然處兒玉雄よりも（防公御意を得能密話聞居候間相托候）其前日篤と事情申含防公へ猶亦上達の處趣意無殘處申盡し吳且堀儀萬一も御下し相成候得者危急を見捨罷下候考に無之不得止亡命致し是非隱然事を謀度平日の決心に御座候段申上候處防公も至極御驚駭左様の譯有之候て何ぞ早く知らせず候哉總州よりケ様々々議定の段承知尤に存候故風と致同意候左様の儀存知候得ば決して此に及ばぬ事に候且大久保儀致出

府事情相達し候而も同志承服不致候はゞ同氣相成り事を起し候者にては無之哉如何存候哉との御事に付其儀に付而者篤と彼が心術承候處云々決心の次第も有之其處に於ては寸毫無疑尤何にもせよ於是者御登せ不相成候而者難被爲濟若江府の有志暴卒の事を起し候へば何れ御國家の御大事にて候得ば御處置を不被加而不相成御處置有之候ては義氣を御挫き候譯に相當り此衰世に常り義氣を御挫き候而可被爲濟思召候哉と難し候處決て左様にては不相濟候何分此儀に付ては明日登城の上再度御評議可被遊昨日町飛脚差立候間則亦々差立候得者隨分間に逢候何分夫程の心底に候得者被遊御安心候段御意被爲在候由必定總州養氏の處一向好事之徒若出府させ候得者無謀の義を醸候者案中彼が所言は名目にて別に一策を持し候との疑を蒙り候故趣意不相達候併防公の處御了解相成候間別而大幸時宜に依而者望を遂候儀も有之候半未だ再度御評議の次第未相分不申候防公も勅諭の上者御猶豫不被遊云々の御決定被爲在候由

一名越左州御登庸相成候御根本被居置御軍備御治定可相成御趣意に候由平仁州自御側

御用承知候得共未御請無之候御側役仰付賦之由兩日中御請被致筈候由何分にも昔日に比し候得者天地懸隔の次第日に正に向くの勢何分難得の時節罷成候彼是御歡察可被成候山壯儀御參觀前是非歸府の賦に候得者貴兄も來春には大刀頭の御時可相成是而已一同祈誠候事に座御候以下缺く

十二月日附不明

大久保正助

菊池源吾様

大山正阿彌の書(安政六年正月四日)

舊臘晦日御乗付以來御安否不伺候得共定て御達者にて船中御究届奉遙察候嗣君御事も無是非御仕合天燃地盡き三國之稱是限りにて只吞聲哭く計りに御座候船中御一人御愁歎如何計り候半扱今夕方久木山歸着草庵へ立寄被表時態豫め承問堀等出立後又々議論相變じ越も漸く持張り今更正論變じ難く此方之議論に押付られ難默止今度之手策も出候筋に相聞得殊更本不立入候得共外に引合之人數無之併橋本事は三度被呼出當分は屋

敷へ親類預りにて候由誰面會も不出來由中根事は益嫌疑相かゝり既に久木山出立前には危く成り立ち候由御座候此度堀發足前治論も此方より之議論に無理に應じ迎も不被行事を捨撥に興復之筋に今更被窺候事に御座候

一京畿今に探索嚴密殊に貴兄廣大に成立京近邊之事何方へか相潜居尤多人數召列れ候て勃興之處大に懸念致候由兎角西郷天下に居る内は世上穩ならざるとの説專に被行候由併忍向僕之口上に依て安堵可致ならん誠に淺間敷次第に御座候

一水府も打捨は不致由極内は老公より密に主上へ御往復被爲在候儀も少々久木山相探り付併仔細は不分明に候

一肥蕃へ堀立寄候處彼方當時長岡等嫌疑甚敷旅客等立入毛頭不調由扱津田宅に於社中四五輩會談屢及事談候處彼方より申立候には我々共議論は御藩には少々相違御見限も有之筈候得共迎も此節出勢之所も容易に六ヶ敷殊に主人は御國と引替全く近衛家杯之様御親睦も無之本より同盟中京邊之時情全く不通急速に突出は猶不容易場合にて肥藩においては變を相待つより外に異論は無之と之様子に御座候由勿論長岡へ

面會不出來して筑後府中において久木山出逢ひ篤と形行申通し吳候様傳言承り候事
右次第御座候間迎も方今勃興之處六ヶ敷未だ天時不至故歟何れ今一機會を相待申外
無御座候何分御安慮可被成扱又堀入京之處も今通にては迎も參兼候様に御座候別紙
有馬書狀寫差上申候間御笑可被下是にて大體之事情も相分り無致方儀に御座候猶追
追申上度早々如斯御座候謹言

正月 四 夜

大 や ま

菊 池 大 君

山 川 港 へ

一於肥藩佐賀之情實聞合候處當時は何も打捨商一篇に被振向貯金之由中々應候處六ヶ
敷併て不遠變に陥り候間其節之用意と御座候由堀より此段も申來候

眞木和泉守隆盛に寄する書 (文久三年)

寸東謹啓仕候時下霜勁候へ共愈御萬福可被成御動履恭賀奉存候次に小弟無異消光罷過

申候乍憚御安意可被下候然者小生來歴者粗御承知も可被下去春尊藩に罷出御大舉之儀
奉願種々妄論をも獻じ尊兄方にも拜面奉願候へ共思敷破行不申己之策を以舉事候手段
に候處於伏水彼之通之儀にて萬事潰散往事思遣候も寒心之至に御座候當春國方之事に
て又々罷出候處尊兄始め諸英毫御慎中之由拜晤も出來不申僅に坂木藤次郎君に心事御
晰候位之儀にて引取申候然處又々禍に罹り殆危く御座候處長州家より之救にて勿體な
くも御内々叡慮を奉汚候由速に上京出來六月八日入京直に鷹司殿下三條公等を奉始有
志之諸公卿拜接朝政相同候處確と仕候御事無之候間迎も皇室恢復難相成と奉存候て長
州諸生申合御親征之御手始として八幡行幸御決議有之度五ヶ條之建白仕候一旦は斷可
被爲行密々小弟迄に被仰付候處三公より意見起り因州米澤阿備世子にも御相談と相成
段々と六ヶ敷に向申候尤小弟之見込は五畿内御直隸に無之候ては攘夷之權を被收候事
も不出來候に付速に右五畿御手に入候様との見込にて右之通り奉奏候處幕吏之所忌に
て案之通り會兇狂妄中川王に奉迫に奉迫八月十八日之大變に推移申候右大變之儀は委
敷御承知も被成候半 玉體に奉逼候致方全く暴横にて奉劫候事明白兩三日之間は不斷

御流涕被爲遊候由其後十八日以前之叡慮は總て矯命にて眞之叡慮に無之旨被仰出候由左様候へば尊攘之道は是限りと申者に相成勿論去夏以來尊藩御苦勞被成候て權柄御取戻し之勢一夜之間に空敷相成當時は已前よりも却て無權只會津と所司代との取扱にて皇室衰弱叡慮と申儀は口舌之上而已にて其實は跡形も無之様相成申候全體兩間之勢三百年已前とも違ひ西洋夷賊萬里之濤を涉候て諸國吞噬仕候世界に相成候ては皇國も彌以平城已前に復し朝鮮滿清は勿論南海諸島一般に我々指揮に令從不申候ては國威を四方に輝候事成不申國威四方に輝不申候とならば禮樂征伐天子より出に無之候ては名正しく言順なる事出來不申極意皇化を海外に敷候に及候ては夷狄も國內に置候事可有之左様無之候て禮樂も不興華夷雜糅候ては天子之可尊譯も自然と消散可致道理に御座候儒學者正敷者にてさへ君臣父子之道古代之純粹取失候事御座候に西洋之僻學流行仕候はゞ内自夷に相成神代已來屹度由緒有之帝室も革命之風に陥り候様にも可相成是等は過慮にも可有之候へ共夷風之可懼事は實に君子之意外に出候事非一候小弟事夷賊之可攘事は勿論之儀皇家之可興候儀今日を千歲之一時と存込去々年冬も尊藩に奉願候儀

に御座候一書生之可悲儀は大諸侯に倚頼仕に無之候ては大業之論議は聞受候人も無之常夏幸に長州候に前文之件々奉説候處一々御尤に御受被成小弟議論御用可有之様朝廷にも被申上候由鷹司公三條公等皆々御聞受宜敷小弟上書も直に叡覽に備り申候由建白之條々御取用にて漸大和行幸も被仰出候儀に御座候御存之通小弟儀去年已來二度踏候へ共可惜世界に付猶又奮發今一度如何卒仕度存込罷在申候尊兄御見込者如何被爲在候哉御直には不承候へ共世上普通之尊王攘夷とは違候て一層御超逸之様奉察候事に御座候是迄尊藩第一等を隠し世間所好之第二等に御從事被成候事と奉察候處此節者皇朝興亡之所關に付斷然御打出し被成第一等に出候て奈良已前之政事に被復候様有之度尊兄方に於ても是迄と違候時情に付ては尋常尺寸を御守被成候時節に無之右御打出之儀屹度御盡力被成候様奉存候右御盡力方御國之勢にては六ヶ敷事も可有之哉一體尊兄方秀德逸才を以て御處流相成候事亂命とも可申哉區々謹慎御守被成候時節にも有之間敷權道之御處置も被成候て苦は有之間敷皇國傾覆に至り候ては世に立候面目も有之間敷亦藩國獨立候譯も有之間其輕重御比較御覽被成候はゞ便宜之御謀も不得已事と奉存候萬

一御超逸之御謀にも出候はゞ防州三田尻にて三條公之御爲正人相募申居候間幾百千人にても相聚候手段相計置費用等には事缺不申様屹度工夫も致置候間高橋新八郎君、是枝柳右衛門君、伊牟田昌平君其外御城下にて坂木兩君始正議之諸君子被申合御光賞被下候様仕度奉存候小生事夏已來長州侯御父子並藩士大夫之志を察候處勤王純粹防長兩國を以打込候と申極意にて實以世間尋常之志には無之就而三條公奉始七卿も御倚頼被成候事に御座候さて其三條公は御聞及び御座候哉當年二十七歳に被爲在候へ共徳量と云御材識と云慮も有之膽も有之實に王佐之才古昔之藤房公御同様三條西公之純徳東久世公之英發壬生公之溫和四條公之武毅錦小路公之明敏澤公之卓識何れも世に希なる御人物急度天下之重を御任被成候如此公卿侯伯御打寄之事に候へば他日大事業は必成可申と相樂罷在申候此節某々萬里波濤相陵罷出候事に付深々御工夫速に決着被成候様仕度可相成は御見込之處無御遺念御申聞可被下候若又斷然御決心も被成候はゞ御一同御來光奉待候

木場傳内の書

(元治元年六月二十一日)

長崎御交易方にて買入置候茶千三百箱之内百七十箱一昨日伏見へ積登せ跡残り者追々伏見へ受取に般差下候筈に御座候段申出申候爲御見合申上候
茶其外長崎交易品々買入候者は無之哉猶又聞合致爲置候處濱崎太平次手先之者共五月中旬茶積下候風説有之同人手先入來利平次相糺候處最初は僞り居申候得共嚴敷詰申候處去る五月十二日自船保壽丸船頭徳右衛門船より自物茶五百箱調保丸船頭喜三郎船より自物茶三百七十箱壺入八十七本抜積いたし候段誤り出兼て交易品積下候儀不相成段者嚴敷申達置事御座候處別而不届之至御座候就而者下之關筋通船之筈候哉相糺候處東目筋通船いたし候様申付置候段申出候得共大膽不敵之奸商共實否承知難成中途掛念之事に御座候且買入方之儀於何方何頃買付候哉相糺申候處去冬時々於伏見買入候段申出申候間手先三橋休八儀何篇頭取取扱いたすものゝ由御座候間今夜早々乗船下國いたし候様申付入來利平次儀者御商法綿茶當所並兵庫へ有之由申出下國爲致候而者首尾相成不申候間右片付迄之間御屋敷長屋へ召置右茶綿賣片付候上歸國申付置申候且亦柿元彦左衛門倅並手傳貞右衛門儀茶綿商賣いたし候聞得者無之候得共何分藝州交易に付音高

く長崎交易相混じ申候間兩人共歸國申付其外往來持參不致商人共都て歸國申候依之先達而申上候通蒸汽船より便船にて罷登候ものは迄無往來にて上阪之者のみ有之由御座候間屹與取締向被仰渡且長崎へ一往に而も差越候大商人は勿論手先たり共此涯上阪不致様被仰渡度奉存候此等之儀於御國元屹與御取締向無之候而者商人共内々之咄合に者御物様より茶御交易被成候間差支は有之間敷位に申居候由御座候此段申上候以上

子六月廿一日

木 場 傳 内

大島吉之助殿

大久保一藏の書 (元治元年十月六日)

於御當地御兩殿様益御機嫌克被遊御座恐悅御同慶奉存候先月十六日同十九日之御問合去る二日相達拜見仕候其元形勢日々相變阿部閣老隨分宜鋪越公御會議之處御合論に而征長速に相運候御模様成立候段無此上結構之御事に奉存候尾公御出京御内評通押而御請之都合相成御進發相決出軍之御注進有之候處吳々奉待事に御座候就而は其元人數を

以藝州陸路突入道開いたし驅り場の見切を以御國元御陣所え注進可被成之趣致承知候攻口之儀に付而は小松家御出立之節御願立之趣も有之候付猶其元形勢に依り御吟味之上御取計有之候半參集場所之義は最初前之方に御手相附候得共先鋒之御達替且御願立之趣に付小倉え振替候方可然と之御吟味に而既に黒田嘉右衛門等利地取究方として被差出置候付若出軍之日は彼地え參集可致候付左様御含可被下候自ら御日限相決候はゞ彼是之儀委曲御含め事情に達候者一人御差下可相成奉存候無左候而は懸而之事故旁相違に及候半と相考候

一太夫も疾に御上京相成候半と奉存候就而者御見据を以御國元急務と相成候付而者太夫貴兄等急速歸國相成候様被仰含候付委事御承知に而御吟味も有之候筈併征長之儀彌相運候向に候はゞ暫時御見合之處に決候歟とも致推察候懸而之事候得者情實相成兼候へ共兎角困循には流れ安き形勢且朝令夕變之有様遲寛之向に候はゞ斷然御歸國相成候方可然若御兩人ながら御歸國難被成形行に候はゞ御一人丈者是非御斷決有之度御願申上候詰り大志を達する之根本に着眼不致候而者難相濟時節と奉存候

一安行丸去る五日方出帆之賦に候得共征長急速可相運之模様御申越相成候間一應御差留相成候譯は小蝶丸も損所有之長崎え被差越器械積之蒸汽船は取仕立方急に運兼未長崎より不相廻軍艦は銅壺屢々相損當分も修復中に而名は軍艦に而實は其能は無之候間先は被留置候方可然と之事候得共翔鳳丸も速に歸帆之賦に御達安行丸着船無之共出帆いたし候様小太夫えも御問合申上置候得ば何分早日被差廻未翔鳳丸滞舶に候はゞ交代に而則歸帆いたし候様との御趣意に而俄に出帆被仰付候模様依而は御一人は御乗船に而御下り之御都合可相成歟と奉待候返す々々出軍之場に相成候得ば翔鳳歸帆なくては相濟不申候付安行丸達し次第早々出帆いたし候様無御手拔御取計可被下候

一一橋之處當分如何様之向に御座候哉矢張忌諱を憚り御關係無之御見合之向に候哉勝安房守え御面會之由議論之趣實感服仕候阿部閣老隨分宜鋪候由勝氏等同腹之方に候はゞ定而凡庸に而は有之間鋪願くは征長之處是非相運候様有之度一日延候得ば益味方之害而已尤夷人も長く相待候にも有之間鋪遅延に及候得者攝港廻舶も難圖事に御

座候徳川氏之興亡實に此一舉に可有之候

右今日安行丸出帆定式飛脚被差立候付御問合之御答旁大略申上越候以上

十月 六 日

大 久 保 一 藏

大島吉之助様

高崎猪太郎の書 (元治元年十月)

去月廿五日大坂出帆不順に付漸く晦日岩國之内新港へ着筑藩喜多岡勇平と申者同所へ城下之様子私に引越居候處同夜四つ時分同國役人香川諒横道八郎治と申兩人是は用人之由喜多岡同道私旅宿に罷越候に付巨細山口表之事情承り候處當分主人監物事も山口へ罷越留守中是も必竟宗家をして恭順謝罪之道も爲盡度若其効ならずんば再不歸との決心にて家中一同へも申聞罷越申候由右に付追々事情申越候には何分是迄激黨志を得何事も其儘暴威募り恭順杯思もよらず依之元家老毛利能登同伊勢を復職相叶候處其通被行候得共矢張暴輩之勢甚敷候に付兩太夫暫引籠候得共是は深義あるよし是に大臣正義之者と吉

川同腹之由萩城下之外是は正義と唱へ或は各目跡閉居等蒙居候徒黨千三百人計山口へ押寄監物等之心願にて激黨退去之路を廻らし候由乍去中々暴黨勢強く正義立兼候姿大膽暗愚長門守は兇暴にして黑白を不辨監物杯唯今理解致居候得ば又過激黨に被惑候勢に殆監物も所置共折候由然處頃日下輩之人之書狀中に麻田公輔死候段申來未だ表向懸合申候には無之候間實説は分り兼候へ共懸合居には相違無之右は是迄之暴所置を悔悟自ら及恐縮候哉又は正義之者に被致暗殺候哉抑正義黨刺通候にや不相分乍去死し申候へば左右誠に國家之幸福也と大慶之義に御座候京都暴動以來三太夫は徳山へ御預けに相成候へ共麻田並に前田孫右衛門要路に顯れ色々政謀を働候に付監物も是非共兩人を退けずんば我志不被行との勘考差起候由當分は右旁之事にて死去に及候半と兩人之下墨に御座候依之勘考致候ても監物之心底抔正義之人に相違無之香川横道も隨分實直之人品にて色々打解け談合も有之尤萬一官兵境に臨候へば心底更に無之大膽父子も同斷之心得に候との事激黨退去之策略外は無之若此上何か心寄り之義何事たりとも預教訓度との事に候間左様之筈なれば別段可申上所存無之乍去唯御詫と計被仰立候共連も

其詮有之間敷最早御宗藩之社稷存亡之境に相成候上は社稷を重じ正義之有志より激黨之所置を計りて之上之御詫ならでは其印も有之間敷段申入候處成程尤之御事なれども左様之猛斷出來候宗藩に候へば此位之失策は無之候へ共事に臨ます候ては何之所置も出來不申此上は片時も早く官兵之來るを待其上は如何様にも所置可仕其場に罷成候ては是迄尊藩に對し無申譯無禮も仕なから何卒可然盡力相願度との事に候間隨分事理當然を以て盡候事ならば御取持可仕尙又重役共へも申聞候旨可然致返答置就ては色々持參候事も有之候間監物君へ御面會申度一往御歸宅之御都合に出來申間敷哉と申入候處兩人も是非左様有之度候間是より香川山口迄差越密々其段可申入併當分引取候ては正義之勢抜け可申候へば連も引取り申場合にも至兼可申哉兎角是より罷越何分返答に及候との事に候間私は翌日藝州城下へ引取申候多分今明中香川此方に參り何れにも返答有之候はゞ山口之事情相分り可申と相待居候事に御座候右兩人之論談彌實説に候へば内情紛紛之姿然ども官兵臨候へば激黨のみは敵對可致哉も難計其他正義之黨勢は微々として不振姿併彼より萬一内亂を醸候へば此上之好機會に御座候尤國內人民手足之措

處無之餘程苦歎之所に御座候五卿は矢張山口近邊に御在任之由追々大膳父子面會も有之候との事に御座候久坂は彌鷹司家に於て割腹候由桂其他之有志は不殘歸國に及候由に御座候私も模様次第に駈登り可申哉も不被測併不日に一同御發足にも可相成候へば大抵之事迄は於爰元御待可申上と奉存候且又御地之都合次第にて貴殿早々御馳下り有之度無左候ては爰元より山口迄之路程遠近難場差別も有之御地にて計較通りに參り兼候事ども多端有之と奉存候先は此段藝藩飛脚に付托右之通申上候以上

大島吉之助様

高崎猪太郎

山田右門の書

(元治元年十一月十日)

尊翰被成下拜見仕候如貴諭追日寒冷相募候處爾後益御機嫌能去る六日其御地御歸着被成候旨珍重御儀奉存候過日弊境御越被成候節は萬々不行届失敬之儀而已御座候處厚御挨拶被仰下却而奉恐入候就は去る七月十九日御尊藩え御生捕相成候者ども此度被召列

其御地え着相成候由右之者共元來卑賤陪從之輩に而是非も不相分全く無罪之者に而是迄御尊邸に御養置彼成宗藩平定之上御引渡之上苛酷之處置に不相成候様被成度との御存意に被爲在未成否も不相決儀に候へ共其御地迄御列越被成候處生國も耳目に近き所に相成候へば歸心難留は通情の儀に付遅速に不拘御宰領衆御付被引渡被下候付請取可申左候而取扱に及時機に候はゞ御尊藩之御趣意汲取助命之處周旋可仕旨御委細被仰下候趣承知仕現人御請取申上候間早速宗藩之方へ引渡可申候何分彼是不一通御厄介之御儀に御座候處厚被加御慈憐候段別而難有何も尊諭之趣を以取扱候様周旋可仕與奉存候右御請爲可申上如此御座候以上

十一月十日

山田右門

大島吉之助様

二白新湊に而御請取可申上旨御諭書之趣承知仕候

平田大江の書

(慶應元年二月二十五日)

一翰呈上仕候春和之時節御座候處彌以御勇壯被爲入大悦奉存候然者先日は初て拜顔仕申候處國許之情實筑藩より御承知被下置私よりも申上候次第御憐察御懇情之程肺腑に徹感銘仕候奉恥入候内情有之長州迄罷越申候付馬關より出船アイノ島へ繫船仕御乗出しの御様子に随ひ壹州之如く出帆仕り可申候仍ては舊藩濱田孫三郎青木小藤太郎御地へ差出御談申上候間宜く御聞得可被下候御威光を以宗家無別條安堵に至り候儀千萬奉願候兩人取合略呈仕申候失禮御高免奉仰候不日拜顔萬々御教示可奉蒙此段申上度早々呈廉毫候恐惶謹言

二月二十五日

平 田 大 江

西郷吉之助様

尙々奉願候筑前よりも御役者御同伴被成下候處御談合被成下候様千萬奉希上候以上

大久保一藏の書

(慶應元年九月二十三日)

三十一日早朝又々二印之通り御内書被成下候昨夜朝議之次第不奉伺候得共御書中御説

も被行兼候趣にて尹宮參殿は被止山階宮へ出候様との御事に候得ば既に今日大樹參内に候得ば端釣之間合にて大事之成否に關り候間兎角尹宮へ參殿打破りて大義を吐き動立候外無之と決し參殿候處夜前徹夜之御評議にて未御寢中にて巳刻頃拜謁被仰付扱言上仕候趣當時弊藩之儀幕府は勿論朝廷より御嫌疑を奉請候得者御名義共被行兼候と察し候得者存慮可申上候所存は無之候間小臣等に於ても同様之心得にて其趣意を奉じ是迄黙止候得共既に今日に至りては朝廷内外之御大事若御所置を被爲失ては乍恐奉救道無之王家之衰滅顯然に候間實に不得止一己之存慮を以て言上仕度參殿仕候既に昨日は御評議被爲在候由如何様之御内評に被爲在候哉何分奉伺度と申上候處其事に付昨夜も色々紛々之論にて候得共眼前外患も迫り居候得者内外一時に難を醸し候ては迎も不容易難事に候間兎角列候被爲召公議を以て相決し候方可然との説相立其議に同じ當職一會桑へ御示談相成候處承知之體無之攝海異舶之事は阿部豊後守下阪致候得者應接之上御受合申上退帆爲致申候間此儀は御安心可被成候列候被爲召候事に相成候得者大に時日を延し其如何之故障到來も難岡且又幕之職掌も不立候故是非言上之通り御許容相

成度趣推して申張色々御論も相立候得共中々聞入候丈に無之終に不決して夜も明け候由言上之趣書面を以て申上候大意左之通之趣意にて候由

防長所置之儀順序を追ひ種々手を盡し末藩兩家を召し候處御請不致當時日延し外末家又々本家々老召寄候得共御請の體に無之既に二十七日之期日も差迫候間其迄御請不致候故不得止兵を進め糾明仕度云々

右大意之趣にて候段御咄に候追て承候得者内實は當夜言上之通り被聞召との趣にて勅許相成筋御意相成候由始め玉石相分け至當之所置可致との御文言有之候處御削被下候様申上相御請を下申上候追討之名何れに御座候哉若朝廷之大事を思ひ列藩一人も達し候はず至當之筋を得天下勅命と可申候得者非義之勅命は勅命に非らず候故不可奉儀御座候然者只今にては防長二ヶ國に候處右通列藩命を不奉日に至ては先後左右長州たらん時如何に御處置可被成哉只今衆人之怨み幕府に歸し候處則朝廷に背き候様相成候得者幕府之難を御買被成候道理に御座候ヶ様申上候得者長州同意或は討幕之趣意とか可被思召候得とも斯る大事に臨み左様之私意を以て論じ候者に無之唯名分之處存大義

之所關を以て御評論申上譯に御座候若一會桑閣老邊へ御示談被下候は別て忝所望候間義理判然議論可仕候假令其上幕罪に被陷候共辭退不仕心底に御座候段演說如何被思召候哉と御伺申上候處實に最との思召と計にて暫者御當惑之體にて良ありて後難之處は左も有之一會桑より言上之勢何分手強く候處迎も力に及候丈けに無之と御歎息にて尤之趣意不可至中に被行兼候間此方も今日參殿之上當職へ御斷り申上早出致し候含に候段御沙汰候故夫は奉恐入候如斯大事に臨み御傍觀被成候て御本志に叶可申哉何等之爲めに御歸俗被爲成候哉と可被思召候哉と押詰奉り候處成程尤之事にて候左様なくば迎も此方一人相含み候ても無詮候間當職へ是より參殿致し可吳最早時刻も移り候間早々と被仰候間委曲奉畏候へ共中々不都合之私拜謁被仰付程無覺東段申上候處御直書御渡し是を持參候様との御事にて則請取二條家へ參殿致候得者既に未之刻に相成候形行高崎へ問合せ御書差出候處無程拜謁被仰付候間前條宮へ言上之趣同様無殘處申上候處御沙汰に先何は扱置き近來薩を拒み幕習有之との説段々申觸候段折々聞及甚迷惑に存候兎角愚蒙之此方不行届之儀は多々有之事に候得共御名殿基本を被爲開候而事如斯に相

成候得者忠誠無二之藩たるは兼て所存候間左様相心得可吳決して色々申聞も有之候得共解釋致候様初て御沙汰に候間以之外なることを奉承知候御名目存慮朝廷幕府之嫌疑如何程蒙り候とて忠誠之變する處無之勿論方寸之内明白に候得ば確乎として人怨候儀無御座候小臣等趣意を奉ずる今日に候得ば御前方之御拒み之何と申事思寄らず事に候間御安心被成下候様申上候扱御沙汰に防長所置に付言上之趣至極尤に候昨夜も段々議論も有之候全體此方所存只今に成は不得止譯存候寛大之御所置と申は伏罪之上に有之譯にて當夏頃迄は伏罪中之事に候間大樹參内之節も不可討之論にて進發を止め寛大なる所置に取扱候様御達しに相成り右之旨を奉じ姫路迄之發程を止め華城に滞在末家並に本藩家老召呼候儀兩度相達候處御請不致殊に昨夜伏罪之御達相成候四ヶ條之趣

五卿之渡海之事

山口城破却之事

激徒處置之事

謝罪狀之事

右之内五卿渡海のみ御達之姿に候得共無間も山口城は築城激徒直様再發唯今に至而者却て登庸致候場に相成り謝罪狀も不差出是を以て伏罪に無之儀顯然に候得ば伏罪せざれば則朝敵に相違無之候全く之朝敵に候得者可討之儀不及論候然處昨夜議論中に眼前異船來港一時に混じ候ては大事之譯に有之候間列藩之存慮御尋相成度との事候故其儀は此方も尤に存じ同意之上武邊へ論じ候處異舶之儀御受合云々と申事には不得止事不被行終に言上之通被聞召との趣にて御内定相成たる事に候との趣御答に候間夫は一通御尤には御座候得共形のみを推し候譯にて本を正し理を不踏御論と奉存候全體幕府進發する趣意盡く勅命に反し剩へ參内之節朝廷を輕蔑し奉り候始末天下所知にて誰か之を可不憤御當地より大阪邊は下匹夫に至る迄幕府を惡む事甚敷進發に付ては最初尾老公越老公藤堂公伐長之不可を名義判然建言にも相成り親藩さへも御爲に不宜と存じ名を正し義を明かにして言上致候て是を止め候譯に候間列藩に於ては不服之こと差見候譯に御座候然に長州に於ては昨冬解兵後早速御處置振り御達相成候はゞ無異議一氣拜服可致候處却て尾總督幕府之嫌疑に觸れ出府を責候譯共有之又上洛之命も不奉強而大

膳父子出府五卿護送之幕命を主張候次第世人誹議せざる者なし如何様伏罪之者たり共激せざる道理無之然處當春尙又朝廷之寛裕を以て大膳父子召呼五卿護送之儀は先差置何分速に上洛致し候様諭し玉ひ候を種々御斷り申上候終に進發と申候て出掛候譯に御座候尤昨冬征伐之行掛にて決し候譯に無之三ヶ條之罪狀を以て進發致候との事に候得者叡慮に背き候譯にて御座候又昨冬征伐之行掛に無御座候得共筋も違候儀全く幕之怨討に候得ば長州假令伏罪とは乍申首を伸て相待候道理無之と奉存候雖心得ば若し其通にて勅許相成候得ば反命之國々多し如何御處置可被成候哉寛大之御處置は伏罪中之譯(不明)との趣如何之御趣意に候や朝敵と申者候得者誅伐に及候事に候處全體當時皇國は幕府より内混亂し外切迫之處より昨冬御征伐にも謝罪御採用時世に應じ寛大之御處置爲相成事と奉存候得者時世に依り大小輕重之取捨あることには有之間敷哉異船之去來を以て爰に寛急を論ずるは難心得假令此度來舶せず共兵庫開港は彼等年來之宿望に候間危急無此上假令此度一時退帆致候共寛と申譯に無之候と一々辯解致候處成程尤之儀に思召と之御事にて外に數件御問答有之候得共段々理を盡し申上候處終に御閉口に

て一々言上之趣利害得失尤に候然るに昨日迄一會桑に同意致し夜前も同斷御内定迄相成居候就ては實に難問にて若し御許容不相成候得者忽眼混雜を生候は案中に候如何致し宜敷候半と御尋に付御許容無之と申譯無之重大之事件於朝廷も御裁斷難被遊候間諸大名存慮御下問相成と之趣を以て御達し相成候得者何之子細無之と申上候處成程其通候へばそこに成と一會桑之處は辭職退身と申す事に相成候者案中に候左候はゞ忽ち混雜致し東西隔絶之勢相違無之と之御事故成程左様之譯も可有之候得共勅許相成候先之御難事其節に相成候得者御安危に拘る御大事に候右之通條理相立候御沙汰に不平を生れ辭職退身など申候はゞ朝廷に對し不臣之者にも候間其通被仰付可然事に御座候兎角當職之御任は大事を被決候に至公至平を以て大義之立處にて無御顧念御裁斷不爲在候ては凡て私に陥り右之趣意則幕習之評御受被成候處に御座候と申上候處左様ならば兎角内府公尹宮山階宮へ御示談被成十分御盡力可被成候間内府公へ尙又申可吳返々も朝廷之御爲を存じ申上候趣意尤に付相叶候丈は振りはまり可相盡候得共若し不被行時は薩論を拒み候杯と心得不吳候様御頼なさると之御事に候間奉恐入候其段は御懸念被下

間敷乍然若不被行時は今日限之朝廷と奉存候段申上退出直様内府公へ參殿形行申上候
既に酉之刻に及候

廿二日昨夜半三印之通り御内書内府公より被相下候依て今朝尹宮へ參殿之處精々言上
之儀に付四人申談候上衆議に涉り候處段々異論も有之尤も武邊に御談之處固く異論に
て終に叡斷を仰ぎ候と申す事に相成り當職より於御前逐一言上之處既に昨夜内定之譯
も有之其節は幕へ委任可被成併し薩州より爲皇國言上之趣意御感不淺とし御沙汰も被
爲在候折角志を以て申上候儀不被行遺憾に可存候得共色々宜敷汲取候様淺間敷御挨拶
奉恐入より外無之且又當職より參殿致候様申來罷出候處前條大同小異御挨拶長々敷尙
此上多難之御時節に付不差置存寄之儀申上候様御頼み被成候言上不被行に懲り以來何
も不申上と云様なることにては大變に候間決して不平を生ぜざる様くどくど敷御沙汰
奉承知候に付全體言上仕候も朝廷之御爲にて決して私論を以て薩之爲めに申上儀無之
候間不被行逆不平を生ずる抔は不思寄事に御座候併此度之事は實に朝廷之御大事存込
之時と可申候得ば皇國忽ち暗夜と成候心持にて千載之遺憾に御座候と申上退去致申候

右之通大略之形行にて御座候急卒之間不綴之文餘言計之小事等書載せ申候間御取捨
を以て御推讀所仰候以上

九月二十三日

大久保 一 藏

西郷吉之助様

追て猶又昨日正三卿へ參り候へ者大樹へ佩劍陣羽織地之錦三卷會より前以て當職へ
周旋拜領相成候由深意あるべし
一勅許願之書面之内に何れ兵を西し糺明仕度兵機之寛急遺算無之様指揮可仕旨之趣有
之由に正三卿御咄なり

蓑田傳兵衛の書 (慶應元年九月二十九日)

追々之貴翰且去る廿日仕出之御飛脚より之御用封今日相達忝拜見仕候於爰許御兩殿様
益御機嫌能被遊御座恐悅御同意奉存候貴所様御安泰被成御滯阪奉欣賀候然者今般兵庫
異船數艘渡來之事件早々被仰越實以不容易重大之事件彼是御配意御盡力深察仕候御書

面各通共則太守様達御聽中將様御儀當分指宿御先越中之御事に御座候間則飛脚差立達聽可申候今度之事件皇國御安危界兎角公平至當正大之御所置に依て大地盤相居り候處則より必至之御盡力依時機者御上京之賦追々事情相分候はゞ被仰上越可被下候何分朝議も危次第苦心之至御座候桂小松太夫にも無御別條候先般被仰越候岡崎御屋敷一條も至極御同意之事にて小松君より委細御掛合相成賦に御座候小子よりは相略申候此御地當分は先靜謐格別申上候程之事件も無之候今日定式飛脚被差立候間大略御用答如此御座候巨細者後便可申上候恐惶謹言

九月二十九日

蓑田傳兵衛

西郷吉之助様
奉復

今度異舶渡來之儀者却て大機會に候半歟皇國大基礎相立候所吳々も御盡力之程奉祈候小笠原出職大久保御用召之由御同慶勝房翁御引出之處此機會にては第一與愚考仕候御盡力伏て奉希候

黒田嘉右衛門の書

(慶應元年十一月十五日)

御問合之趣拜承仕候田沼玄蕃頭一昨日蒸艦より着阪相成候得共事柄未だ全不相分追而探得次第可申上又大樹公上洛の儀於爰許も巷説喧敷相唱候得共是以突留候正説者未だ承得不申候征長人數者別紙の通追々出立來月十日限藝州廿日市迄押掛る筈與歟申し騒居申候處永井主水正戸川鉾三郎に者去る六日爰許出立にて明六日廣島着の賦餘程遲寛の宿割と申事に候藝州藩士も申居候永井發足の砌赤根武人淵上郁太郎峰軍之介三人出牢爲藝州へ引越候由左候而此節者諸伺と申談しにては無之折角丁寧説得の趣意相含差越候様永井へ密達有之候由然時者内に者無事寛典を好み候に相違無之右通人數繰出し騒敷く表向に見せ掛け候者例の婦女子を畏す虚喝と相見得却て笑を取候仕形に御座候儲又筑前の形勢近來言語同斷大音兵部益暴威を振ひ櫛橋内膳とか申者を先達で差登せ今度幽閉せしめ候者共之所置を窺ひ密に幕府の内命を得て黒田播摩矢野相摸兩人は永牢加藤司書、吉田主馬、建部武彦、近藤登、中村到、月形洗藏以下六十餘人割腹斬首

野村助作より承候尤も右人々の母妻子までも遠流其他有志の輩に不殘候由先日平戸藩士上阪掛け宰府へ立寄り聞取來候彼藩態々の談に承得候誠に慨嘆に不堪次第に御座候別紙閣老より夷へ被相渡候書付既に御覽に相成たるかとも奉存候得共手に入候儘寫取差上申候尙此段追々承得次第可申上候以上

丑十一月十五日

大阪より

黒田 嘉右衛門

西郷吉之助殿

黒田了介の書 (慶應元年正月七日)

其後不得貴意候得共倍々御勇健可被成御座珍重奉南山候然ば小生も去月廿八日防州三田尻港出帆仕候處不順にて漸く今夕方に着阪御宅へ罷在申候就ては桂氏(木戸氏)外に上下八人同船仕右御宅内へ罷居られ申候扱木戸氏儀實に先生のみ偏に被相慕此節上國相成申候付願くは乍大儀伏見御宅へ同伴仕度御座候間右へ御待迎ひ被成下候儀相叶間

敷哉明五ツ過爰元出帆の筈に御座候に付少々宵に入可申候間爲御案内申上置候尤其御許御都合も可然様奉頼候先以大略要用のみ如斯御座候謹言

寅正月七日

黒田 了介

清 隆 花押

西郷吉之助様

黒田嘉右衛門の書 (慶應二年正月七日)

柴田へ被入置候一條其後小笠原家多賀表兵衛へ委細申込候由御座候處大に驚愕いたし自ら其儀は多賀より拙者へ面會可申解候間兩三日相待吳度との返詞にて其後于今爲何義も無之然處今日俄に板倉小笠原兩閣老上京之由一昨日比關東より井上河内守着阪蒸汽船三四艘入津大樹公より近々東下之筈候由畢竟兩閣老上京も其儀に付ての事かと被察申候偕又長州一件は先穩にて彼方家老宍戸木梨兩人もいまだ藝州へ滞在今一應之御沙汰相待居候由此節は大小監察而已ならず閣老も一人は廣島へ被參候との事候へども

いまだ程合は不相分段藝州藩士より承得申候此段形行早々申上候以上

正月七日

黒田 嘉右衛門

西郷吉之助様

木戸孝允阪本龍馬に贈る書

(慶應二年正月二十三日)

奉呈亂筆候に付得と御熟覽御推了不足之處は御了簡奉願上候

拜啓先以御清適大賀此事に奉存候此度は無間また御分袂仕候都合に相成心事半を不盡遺憾不少奉存候乍然終に行違と相成拜顔も當分不得仕事歟と懸念仕居候處御上京に付候而は折角之旨趣も小西兩氏等へも得と通徹且兩氏どもよりも將來見込の邊も御座に而委曲了承仕無此上上は皇國天下蒼生之爲め下は主家の爲においても感悅の至に御座候他日自然も皇國の事開運の場合にも立至り勤王の大義も天下に相伸び皇威更張の端も相立候節に至り候はゞ大兄と御同様此事は滅せぬ様後來の爲にも明白分明に稱述仕置申度乍然今日之處に而は決而少年不羈の徒へ洩らし候は終に大事にも關係仕候事に

付必心は相用ひ居申候間御安心は可被遣候弟も二氏談話の事も吞込居候へ共前申上候通畢竟は皇國の興復にも相係り候大事件に付試に左に件々相認申候間事其場に至り候時は現場皇國の大事件に直に相係り事そこに不及して平穩に相濟候とも將來の爲には相残し置度儀に付自然も相違の廉御座候はゞ御添削被成下候而幸便に御送り返し被成遣候様偏に奉願上候

一戰と相成候時は直様二千餘の兵を急速差登し唯今在京の兵と合し浪華へも千程は差置京阪兩處を相固め候事

一戰自然も我勝利と相成候氣鋒有之候とき其節朝廷へ申上屹度盡力の次第有之候との事

一萬一戰負色に有之候とも一年や半年に而決而潰滅致し候と申事は無之事に付其間には必盡力の次第屹度有之候との事

一是なりにて幕兵東歸せしときは屹度朝廷へ申上直様冤罪は從朝廷御免に相成候都合に屹度盡力との事

一兵士をも上國の上橋會桑等も如唯今次第に而勿體なくも朝廷を擁し奉り正義に抗し周旋盡力の道を相遮り候ときは終に及決戦候外無之との事
一冤罪も御免の上は雙方誠心を以相合し皇國の御爲に碎身盡力仕候事は不申及いづれの道にしても今日より雙方皇國之御爲益威相暉き御回復に立至り候を目途に誠心を盡し屹度盡力可仕との事

弟においては右之六廉之大事件を奉存候爲念前申上候様戰不戰とも後來之事に相係り候皇國之大事件に付御同様に承知仕候而相違之義有之候而は終にかゝる苦心盡力も水之泡と相成後來之青史にも難被載事に付人には必知らせずとも御同様には能く々々覺置度事と奉存御分袂後も得と愚案仕毛頭無御隔意處を以内々大兄まで爲念申上候義に付右六廉得と御熟覽被成下自然も弟之承知仕候相違之義も有之候はゞ必々御存分に御直し被成遣候而此書狀之裏へ乍失敬御返書御認め被下候而幸便に屹度無相違御投じ被成遣候様偏に々々奉願上候實に此餘之處は機會を不失か第一に而いか様の明策良計に而も機會を失し候而は萬之ものが一つほども役に相立ち不申事に依り候而は却而後害

と相成候事も不少兎角いつでも正義家は機會を失し候等之事は其例し不少終に姦物之術中に陥り候事終始に御座候間御疎も無之事に御座候へ共此處は精々御注目被爲成候て御論述皇國之大機必無御失却御回復之御基本相立候處奉禮處に御座候

乙丑丸一條小事には御座候得共委曲御承知の如く一身に取り候ては困苦千萬にて且海軍興廢屹度相係り候事に付何も逐一御存之譯に付兼て存じ通に相運び弊國の海軍も相興り候様無此上吳々も奉願候何分にも小松太夫吞込吳候ては實以困迫此事に御座候隨て海軍は廢滅に至り可申候と懸念仕候先は前條之次第愚案迂考仕兎角一應可申上と奉存相認候義に付前條委曲申上候通之次第に付得と御熟覽を賜り必々御裏書にて御返書偏に奉願上候其中必々時下御厭第一に奉存上候乍失敬御序之節小西吉氏等其外諸彦へ可然御致意奉願候委曲御禮書は歸國之上出し可申と奉存候爲其勿々頓首拜

正 月 念 三

尙ほ本文之處は吳々も得と御熟覽を賜り萬一も承知仕違への處は御直し被成遣候て必幸便御裏書御答偏奉願上候此餘之處は唯々機會の處而已掛念至極に御座候大事は元

より小事にても必成敗は多く機智之失不失に有之申候此邊の義は吳々も御助力皇國の御爲奉祈念候前田恭齋子へ藥禮の事御願仕奉恐入候且恭齋子より詩作も送られ候に付其返答も可仕と奉存居如御承知出立前大混雜にて且々出立仕候位の次第に付其義も其儘打置候間甚以不情不信之處赧顔之仕合に御座候御逢も有之候はゞ此邊之處宜敷御斷り被成遣候而彼の藥禮の處も何にてもよろしくつまり品物に而も可然奉願上候失禮之段奉恐入候無此上皇國の事は不及申上乍恐私事も種々御願申奉恐懼候舉而何もよろしく奉願候唯々御面會の折を奉待候其中御答は幸便に奉願上候爲搦筆頓首

松 菊 生

龍 大 兄

極密御獨折

阪本の裏書

表に御記被成候六條は小西兩氏及老兄龍等も御同席にて談論せし所にて毛も相違無之候後來といへども決して變り候事無之は神明之知る所に御座候

丙寅二月五日

阪 本 龍

水野溪雲齋の書 (慶應二年二月二十七日)

此節御出張之御守衛中御交代にも可相成御都合に御座候處是迄内輪御周旋に相成候衆中も御座候て別段公卿方拜謁相濟候事に御座候得者全く御交代にては是迄之御次第不連續にも自然立可申候に付三條公御内意にては當分拜謁相濟候諸彦丈は當藩へ被差留置度思召に付御賢慮を以て夫々と不廉立滯留被成候様御處分は出來申間敷哉内々小子より得貴意との御事に御座候間卒爾之至に候へ共及御内談申上候不具

二月二十七日

水 野 溪 雲 齋

西 郷 盟 臺 侍 史

岩下佐次右衛門の書 (慶應二年八月四日)

長州も段々踊入組面白相成過日は既に橋府出陣相成筈に而御太刀迄も拜領相成候故當

地に而も一踊初度と樂居申候處案外解兵論相成り故舞臺を失ひ見込違申候基解兵之主意は杖柱と頼たる肥後勢小倉表引拂候一左右相分候處夫に而は逆も勝算之見留無之との事に而術計盡果解兵相成候由去乍越公板倉等之力に而解悟も早く候半會は彌孤立に而馬鹿々々敷舊論立居候由氣之毒之事に御座候下々に而は暴發も可致との風説も有之候得共要路之者共より取押候との事故發程之事は出來申間敷存申候○因州先年斬奸之廿人先達而脱走に而四人は被討取跡石州へ漸く遁候由右に關係之者一人伊王野より被頼申候て伏見へ爲忍置處亦々右之内一人河田政之丞と申者も參候て一所に置候様談置申候國論致方無之不得止脱走之次第に相成候由備前は餘程宜敷と申居候御察可被下候○別紙心得に相成候事と存候間差上申候佛さへ手出しせねば大に安心に御座候得共返返油斷なり兼候者共に御座候

先は右申上度如此御座候猶近日細事可申上候頓首再拜

八月二十四日

岩下 佐次右衛門

西郷吉之助様

吉井氏旅行と存申候間書狀不申し在宿候はゞ可然御傳聲奉願候
ブ等元氣に而候

大久保一藏の書 (慶應二年九月八日)

御兩殿様益御機嫌能被爲遊御座御同慶奉存候次に貴兄彌以御安祥被成御精務奉恐悅候爾後御當地之形勢不思議之變態と罷成大原卿始列公群參之力にて二條殿下尹宮御辭職被仰立候時宜に相成候得共段々内輪混雜之次第にて夫故諸侯御召之事も御延引相成漸漸今日御沙汰相成候而岩下家御出立之都合相成候旁巨細之事情は御直に御承知相成候半態と文略仕候此上御進退之事は御趣意も被爲在且御熟評之上御決可相成候得共何分御大事之時節に御停觀は難被爲出來は勿論來年十二月兵庫開港之期日も差迫今般英夷へ御談判之趣も有之内外實に難差置御場合と奉存候併即今御出馬被爲在萬々御成功之見据は更に相付兼殊に橋譎訴百端之心術至平を以賢候之公論を容れ候儀も無覺東内實は今般諸藩御召之事も斷然朝命之處は色々御拒み申上候次第に而其底意も推計せられ

大藏大輔様にも内實は御憤懣之御様子に被聞申候右旁之形行に而實に此間之御盡力は
不容易御場合に御座候得ば十分御決斷被爲在候上ならでは中々其詮も有之間敷奉存候
幸にして將軍職御辭退固く申上候而此儀は諸藩來會迄は相動申間敷候付誠不可失機會
と存候間共和之大策を施し征夷府之權を破皇威興張之大綱相立候様御盡力奉伏冀候成
否に拘らず可竭は此時と愚考仕候何分宜敷御周旋之程伏て御頼申上候決論之次第等は
岩下家御直に御演說可相成事故何も相省大意迄あら々々申上候尙近々豊瑞丸より可申
上候拜首

九月 八 日

大久保 一 藏

西郷吉之助様

侍 史

追而々決論之形行は早々御往復被下候様萬々奉願候諸藩上京も大方御國を目的にい
たし候半と被察申候御決斷之上は固より諸藩をたのみ候事は出來申間敷候得共一應
は公論を以て御使者にても被差立候様有御座度日頃承る處に而は隣肥餘程模様相變

候由尤長岡監物議論相用られ候向之由斷然たる事は出來間敷候得共薩肥合縦いたし
候得ば風聞計に而も愕然たる模様には相違無御座候小藩にては御座候得共柳藩と大
に結合候筋に相見得申候眞實御國へも依頼いたす嘶振に御座候御召之御沙汰書徳川
中納言より言上候様云々之趣は原市之進を以餘程周旋爲致候由是を以幕威を張候心
底顯然たる次第に御座候朝廷より長防之儀に付大樹之喪に依り兵事見合候様との御
書付一向條理不相立者にて是れ以橋より御調文申上候由に御座候長も止んと欲して
も不能譯に御座候幾重にも右邊之次第にて六ヶ敷形勢御座候故大決策にあらざれば
尋常之事にては御動座なきに如ざる事と奉存候

大久保 一 藏の書

(慶應二年九月二十三日)

兩殿様益御機嫌克爲遊御座恐悅御同慶奉存候儲爰元之形勢岩下家より委曲御承知之筈
其後格別相變候儀も無御座候得共何分先月十六日橋府參内に而公論を以て解兵云々之
儀言上之趣意今日にいたり候而者蓋表裏之事共有之候第一には去る十日頃より原市之

進より除服出仕且前將軍同様之御取扱之儀御沙汰に相成度殿下へは勿論所々奔走いたし候事も有之實に可惡之次第に御座候

一大藏太輔様には頃日愈以御不幸に而候由勿論何も御相談與申す様なる事は鳥渡も無之去る十四日に御招に候故橋亨へ御出内實は御書取を以幕府之本體を御改其事跡を顯し諸藩來會を御待受相成度與之大意に而御差出被成候得共尤與返詞有之位之由近來除服出仕等之事内々周旋いたし候次第も有之愈御憤懣之御様子青山内話に而候一向中將公御上京之のを御待之由

一殿尹御辭職其後沙汰無に而御曳入りに御座候山階宮等より頻に當職御參之事御進相成候得者何共於義も難爲濟是迄同服同論に而御盡力被爲在候事に而宮へ罪在而殿下に罪無し與申譯無之候間一時は宮も御參之上改めて御曳入之處は如何様共可然與之論に而山階宮内府公御談合に而諸藩來會關東出職迄は國事無大小御止與申處歟亦尹宮共一時御參に而改て尹宮は御曳入相成可然之御論に而御相談も拜承致し候に付既に原等前條之周旋も有之事に候得者殿尹御出職被爲在候得者必御迫り申上亦此上に

如何様之御失體被爲在候も難圖左候得者諸藩も彌動き不申尤一時與申ても尹宮御參被爲在候而者天下人心に大關係仕旁利害判然たる事故諸藩來會迄何事も不被聞召與申處に御治定相成居候得者萬全之御良策に御座候段申上置終に御別紙之通御連署に御建白被爲在尙御參之上御直奏相成候處殊之外克御都合に而言上之通被爲聞食與之御事候由尙除服出仕も御決議不相成筋御治定に而議傳へも内府公山階宮より幕府より如何様御迫り申上候共取次不致様此通叡慮も御居付被爲在候得者別而難有屹度御動搖無之處專要之旨再三御きめ置相成候由然處同十八日別紙之通兩役より回達之御書面相廻り内府公山階宮御存知不被爲在事故直様兩役御招呼御尋問被爲在候處殿下より兩役御招呼國事無大小御止に而者廢朝同様に而假へは諸藩四ヶ月交代或は諸藩家老天氣同等之事難被差置候間小事は被聞召候様無之候而者相濟まじくしかし小事も大事に關係いたし候事柄も有之候得者左様之事件は來會之上御決議可相成與之趣に而早速内府公などへ不申上事は如何にも恐入候得共前條通之形行に而取扱候次第と御返詞申上候由原など矢張二條家へは參殿周旋いたし候筋に相見得油斷相成不申

候得者前條通御治定に付而者大事之事件は決而動き申問敷與奉存候原など内策を以て將軍御推任之事を諸藩に説き込み諸藩より盡力爲致候賦與相見得申候既に十藩計り會議いたし段々議論も有之川越藩之者推任之説を主張いたし候由に候得共因州門脇及説破其策も被行兼候姿に御座候畢竟原より根據いたしたる譯與被察申候委曲は武二へ申含置候

一良公子上京如何様之事件申立候哉橋公へも一兩度御出相成候由趣意柄尤も分り兼申候御召に就て之上京に無之直様出立相成重而上京與申事にて柳川十時攝津咄には自國之一件も有之且形勢一覽旁之趣意に而上京相成候様承申候將軍職之儀類に引き進め相成候與之説に有之陽明家へも參殿之筋も一橋之處旁案居候處只今に而餘程御振はまりも出來大慶之次第與藤井へ咄有之候由此節御此歸國懸宇和島御國などへ御出相成御舍に候間序も有之候者申越吳候御傳言も承申候定而扶幕之説には相違有御座間敷被察申候十時より長岡監物之人體承候得者よほど器量も有之筋に被聞全一人之力を以國論も一定致し候由別而御國へ依頼之由に御座候間此節上京には監物隨從に

而上京相成候者至極宜敷候半與奉存候間御賢者可被下候

一岩下家御着にも相成最早御進退も御決定之筈奉察前條之次第に相成殊に來會迄國事も不被爲議諸藩を御待受與申御治定相成候得者早々國元へも蒸艦を以て申越候趣も申立置候日敷を經候得者殿尹之出仕盡力いたし候には相違無御座候殿尹之出仕相運候得者將軍推任者愈被相行左候得者何も水泡與相成候事に御座候御上京御決定被爲在候者一日に而も速に御上京之處萬々奉伏冀候就右不容易事候共此節御召之御文面に而者決議之趣中納言より言上いたし候様與之御事に候得者甚諸藩氣受にも相拘り候事は承知尤御召之詮も無之事與奉存候於國元も御趣意柄に基き盡力之賦に而者決而上京は仕間敷何分危急切迫之今日に相當り不堪傍觀上京仕候譯に可相成就而者依時宜而者御振はまりを以御奏聞被成下候議可被調哉之趣内府公山階宮へ極内々御伺申上候處其節に相成候而者如何様共無御變心御周旋可被成與之趣拜承仕候爲御心得此段も申上候

右概略之形行申上候尙委曲者武二より御聞取可被下候以上

九月二十三日

大久保 一 藏

西郷吉之助様

本文良公子歸國懸宇和島並御國元へ御立寄之事序も有之候者御國元へ申越吳候様御傳言藤井より承居候處其後承候得者御取止相成候由其段引合も可有之事と心得候得共何たる儀も無御座候追而承候まゝ此段申上候

篠崎彦十郎の書

(慶應三年正月十六日)

黒田了助事今般大砲運用傳習方として爰許へ被差出候處追々御聞及も有之候通當地之儀は於府下英式大砲手筋甚微弱之體にて爲指師家も無之段は先便御問合申越通候處右了助事傳習方不調處より歸府申出御國許之様差向度願出今日當地出立致候間京着之上委細之形行は同人より御聞取可給候猶御家老衆迄は例之通御附狀差上候得共此旨形行申越候以上

正月十六日

篠崎彦十郎

西郷吉之助殿

書 添

小銃一條別紙に相認置山々残念口惜存相案居申候處柴山良助黒田了助頻に相勸候儀により終に三百挺丈此方へ引取候儀に致決心今日少々手付金入置近日横濱へ拙者柴山差向引結濟候含御座候依て代金凡三千兩に相及御微力にて中々難及彼先達御問合に及置候於大阪御頂戴之五千兩之内より一應立替置申候考に卸座候自然別紙に認置候通軍方御用にも相成候はゞ右砲器總て大阪迄舟便を以て差廻候様可致左も無之候はゞ於爰許相片付利分を得候儀に取計度若御用相成候時は右之三千兩は御才覺を以て彌縫御取計可被給候此旨以書添申越候何分早便御返事承度其内之處は先づ砲器其儘差扣置候様取計申候以上

別 紙

追々陸軍方御興張之儀に付ては「ミニヘル」筒御用御買入も可有之然し何れ長崎邊にて御調辨又は御買入等も可有哉此表横濱邊は追々千挺揃又は二三百挺揃之賣器相見得已

に先日も千挺の「ミニヘル」筒相見得共惣て爰許において相領候儀は勿論一二百挺たり共御入用之有無難辨無是非買入難整其儘差置候形行に有之以來何様相心得宜候哉良器價格宜相見得候品御座候時は百挺又は二三百挺にても能々吟味之上取入候而隨分御都合相成候哉又は不及其儀次第に御座候哉兼て御都合候處相心得申度御座候存付之旨内内御方迄御尋申越候以上

大久保一藏の書

(慶應三年四月八日)

中將様益御機嫌克被遊御滯坂恐悅御同慶奉存候於爰元從朝廷再度就御沙汰幕府御受相成候後別段相變る儀も無卸座別紙御受書寫等差上申上右之趣にては御達之趣意とは相反し表通告之儀を御受申上候筋に相見得彌愚弄を極め候次第御座候當分之處にては黙として各藩登京之上動靜を顧視いたし候賦に可有御座候越へ引合候處別紙之通返書にて未だ相成り不申兩日中には御日限等も候模様相知れ可申候に付早々申上候様可仕候此段一と先形行申上置候以上

四月八日

大久保 一 藏

西郷吉之助様

追て阿州は隱居家督之御禮も有之十二三日比上阪相成候由に御座候

中岡慎太郎の書

(慶應三年五月二十一日)

一筆拜呈仕候先以益御壯榮御座可被爲成奉恭賀今日午後乾退助同道御議論に罷出申度仍而是大久保先生吉井先生方にも御都合候はゞ御同會奉願度内情に御座候尤強而御同會奉願與申譯には無御座候何分にも御都合次第之御事與奉存候尙又今日晝後之處若御不工面にも候はゞ何時に而も宜敷儀に御座候間不惡様奉願上候右而已乍失敬愚札呈上如此御座候以上

五月二十一日

清之介 再 拜

南洲 先生

玉机下

大久保一藏の書

(明治元年正月二日)

拜啓別紙一覽之上返上仕候然ば尙亦退て及熟考候處今形慶喜上京相成候ては實以難取返次第に立至候は必定に候間是非會桑歸國取計上京と申今日之御達振ならでは難相濟奉存奉候若無其儀上京相成候得ば戦は窮て出來不申今日に相成候ては戦に不及候得ば皇國之事は夫限水泡と相成可申就ては猶勘考之次第も御座候付明朝早目參上可仕候間左様御承知可被下候事理と勢とは未然に相察斷然盡死力不申候ては勢不及日に至り窮策に出候様にては甚遺憾之至に候はずや深思熟考いたさずんばあるべからざる場合と私にをひては決定仕候幾重にも篤と御賢考被成可被下候委曲明朝拜晤可申上候へ共乍序此由奉得御意候頓首

正 二

大久保 一 藏

西郷吉之助様

桂右衛門の書

(明治元年正月十八日)

去月廿八日付之玉翰相達致拜誦餘寒之節太守様益御機嫌能被遊御座奉恐悅候借此節御國事御盡力之御廉々御廟算通一々相運付一時之御功業殊更遂に兵端相開四方八方悉く御勝利官軍日に月に盛成勢ひ御左右毎に御吉報而已相達御家之御兵勢勇々敷朝威相振ひ實に王家復古之御大業相立實に目覺敷形勢と相成飛立計に御座候中將公御感悅彌御順快御機嫌能御同慶此事に御座候然ば先便はいろ々々相雜當方事情餘計之事共申上却て奉煩儀に一々御辯解痛入次第に御座候借因循之先生迄も此度は一番に振立實に勢と申ものは奇妙成ものに御座候兵家之習若哉敗を取候はゞ義不義は不論甚心痛可致之處此節之如く御留守番は先可也相勤可申乍然小松家暫時御留にて少々肩みも出來候へ共甚以申兼候へども何もうせ付られ迷惑御推計可被下候先は此旨勝軍之御祝詞爲可申上如斯御座候恐々敬白

正月十八日

桂 右 衛 門

西郷吉之助様

參人々御中

二白大久保氏へは態々書音に不及候付宜敷御傳被下度奉願上候小松家にも快氣此度上之時機相成仕合に御座候此度拙者登京之賦にて御座候へども不得其機會殘情之至に御座候此末御難澁之御場合はとても無之事候へども不得止事向にも相成候へば直様駈登合に御座候申迄も無之候へども不惡御汲可被下候御地靜謐に向候へば決して邪魔物御免を蒙候賦に相心得居申候

追啓小松家にも此度は至極振はまり決して御掛念之廉無御座候何卒申迄も無之餘計之申事因循相究御笑草と可被成耻入候得共何も舊事は御擔當深御談被下度御願申上候偕奈良原にも悔悟之譯も御座候付是は以前に變て何卒御會釋之御義と存申候必斷然公平之談者俗人之聞處公平不成様心得違候常之事にて乍重復宜敷御汲取被下度御願申上候以上

勝安房大總督府參謀に贈る書

(明治元年三月五日)

無偏無黨王道蕩々矣官軍適鄙府といへ共君臣謹て恭順之禮を守るものは我徳川氏之士

欠

欠

唱る者は蓋し三萬餘なるべし

水田陸田五十萬結

一結とは我之一町歩を云ふが如し日本にて賦れは草高五百萬石に當る

右を戊宗十一年の制にて一結租米二石を以て上中下平均の數とすれば彼所謂明枘を用ひたらんには即ち我の一石にて現藏入米日本の升にて五十萬石

南方海邊に十三の湊有る即京城に米石運に津口なく北方は山多く南方は平地多し故に鮮國の膏澤なるは南方に多し支那より朝鮮を討せし歷代都合二十一度と云ふ每戰朝鮮の敗北せしは大小の勢もあるべけれども嘗て一度も朝鮮人に名ありて正しきの役なしと云ふ米國人押入りしと云河は久祿度の征史に引合するに所謂漢江河なるへし

文祿の役渡(陸軍十三萬海軍九千二百)四月十三日小西行長浦山海に着船し即日五月二日行長取京城

浦由浦の戦より都合二十日に中る

是より後ち軍議不一決且孤なるを以て行長進軍遅々

六月十二日取平城

浦山の後より六十日に中る

滿清より朝鮮初度征

天聰元年正月十四日鴨綠江を越て義州城を攻落し廿二日安州を取る廿六日平城を取る

二月五日黃州を取る

三月三日朝鮮王降和なり

義州初戦より五十日に中る

同再度征初戦より十一日に中る

崇徳元年十二月十二日平壤を攻落す

十四日

前に當月二日に清章高服等に命じ三百の兵を授けて僞て商人之姿にて晝夜朝鮮王の京城を圍ましめ引續て親王一人將軍一人に一千の兵を授て繼進せしめしもの四日鮮兵六千を攻破て王城に至る鮮王詐計を出し逃れ四十里(四里位)の路迫打して遂に朝鮮王を

南漢城と云へる所にて攻圍む廿五日清帝自南漢城の攻手を加ゆる二年正月二日朝鮮諸より來會するの援兵を打破る同十三日朝鮮王降の掛合始る同廿九日朝鮮王清帝の陣門に來て降を乞ふ

初戦より四十八日に中る

右に依て比較すれば文祿度の征鮮は清人より一層速なりとす然れども征討の功否する懸隔するものあるは何ぞや我は百戦の練兵と雖ども海外の征討は初戦なり況んや朝鮮を極寒の地と誤視す故に夏四月に到て討征を始めたりに朝鮮の寒氣北越奥羽に甲乙無きを知らざるにや而鮮人諸道にて遁るゝも往々山に入り從て出て我行軍線を妨ぐ

清人の征鮮は十二月正月に有る故に鮮人雪に障られ山在に出入する事を得ず我は海道の暗きを以て百里外の浦山より入る故に彼奔逃するに便なり

清人は元來地勢の便なると雖も彼僞て商人隊を造り不意にをかし入策を見れば唯鮮王遁れて海外に至る或は加勢の來んことを慮る深しと云ふべし

我當日の兵鋒を以て二念なく打入らば明軍實は恐るゝに足らず而て當時の人々は明は

大國大軍なりと聞き懼れて退避の勢を免れず遂に七年の久しきに至る所謂小西の請和説事を誤るのみに非ずや

今案彼の國を征するや海陸兵四萬を用ゆべし半は進撃手とし半は要所の守とす

康季清の征鮮兵五萬を用ゆ衆寡の用を知ると云ふべし

鮮人の武備を探知するに我の征銃は「ミニヘール」にて適當すべし征兵は新募にて宜かるべし然る後ち魯西亞と戦ふに當て堂々たる常備兵先生方に御次渡申歟又は斜打七連の良銃を申受て我々兵氣を一振して決戦せんか先は朝鮮征伐の夢咄しかたゞ荒々如斯御座候敬白

西 十 二 月

伊 地 知 正 治

西郷吉之助様

尙々本文は朝鮮一條に取調一小冊と成し居候得共先づ大略のみに御座候終り

春日潜庵寄隆盛書

(明治七年五月二十二日)

爾來不奉音問貴國之士時往來此地者言動履佳勝確然之操無變於往跡欽慕羞企向執事議國事不合奉身勇退雖未詳其委曲而世人嘆惜不置在執事則可進可退進綽々然有餘裕也獨所惜者其奈世道之患何僕竊謂方今士風之不振莫甚於此時廉耻退讓衰頹掃士稍有才幹者惠意營利汲々然習商賈之業視不知其恥也風俗人心日以陷溺不知返也夫亦何知以講士人之業也哉士人之業上尊王安民而已矣尊王安民及其大綱也而數目條件非筆端可悉也然非起振士風則不可也起振士風非學則不可也夫學非詞章訓詁之謂固也故有堅苦之志刻勵之操而非合世之俊則無能矣嗟乎士風之不振亦宜矣執事豪傑之士平生淡於聲色財利加之經於艱難困若練磨之功既已非尋常也其興起振作天下士風之衰非甚難也此事非執事則誰望僕也近年散遣生徒杜門却掃雖在村落如深山之中窮居寂寞特志來屆耳執事尙教我乎項側聞左府老公再出來京所謂尊主安民振起士風庶幾在此時乎今日執事之所以講安乎在也乃願聽其緒餘令小弟無恙否爲致意

五月二十三日

襄 頓 首 白

同

向呈一書不知達左右否今又有切迫之事情僕竊觀天下之形勢人情不穩恐遂不免土崩瓦解之患夫左府老公之再出於東京也天下人民屬望庶幾有所為也而老公辭病逡巡不進而執事帶軍師之職逸居不事々殆始閑散人天下之人始有疑焉何者執事在軍師而今不居東京其疑一也老公出於東京而不見執事之隨行其疑二也縱令老公不用執事執事宜盡力竭心補佐老公也況私老公之用執事乎且輔佐老公者乃輔佐朝廷也往年執事之功業卓々然執事之豪邁勇決使然也然亦賴貴國之餘威而然也今機會一失名望頓消後日欲有所為豈可復得也人之疑者不止於疑而始失望矣老公又遂不用執事而執事其時又欲有為也亦已晚矣今日之勢合則事成離則不成顧其時機之決在呼吸之間耳願執事體無我之心去意必之見念天下生民之困苦決然出於東京則天下幸甚切迫之情無所顧慮幸諒察焉

八月立秋日

襄頓首白

南洲全集終



大正四年七月三十一日印刷	南洲全集
大正四年八月三日發行	實價金壹圓五拾錢
著者 山路彌吉	
發行者 和田利彦	
印刷者 神谷岩次郎	
印刷所 東京印刷株式會社	
發行所 春陽堂	

東京市日本橋區通四丁目五番地

電話本局 五六一七
振替口座 東京一六一七

山路 愛山氏 著

鈴木烏川氏装幀

外617
思ふがまゝに

四六判 瀟洒
本文四百餘頁
價 壹圓
送料 八錢

田園の詩人徳富蘆花氏は武藏野の自然に永遠不滅の眞理を見出し
此れは俗塵に没頭して濟澄神の如き實生活を表現す、其熱烈なる
情緒に於ては熟れを劣れりとも勝れりとも斷ずべからざるも唯夫
れ本書は其材多く人事に關するを以て人世に廣助するの神機急湍
の如く滾々として迸る綠蔭の下に本書を翻かば冷風一陣腋を洗ふ
の感に堪へざらん (東京時事評)

東京市
日本橋

春陽堂發行

振替一六一七
本局五一七

~~360~~

~~179~~

0815

SA18

終